俳　句　雑　誌

水　明

２０２２　４月号

令和四年四月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五巻第四号

《今月のかな女》

子雀に楓の花の降る日かな

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

雀は通常春から夏にかけて二度子育てをするそうで、晩春に新葉と共に咲く楓の花と子雀とが自然の体をなしている。完璧な季重なりの句ではあるが、全く気にならず、かな女ならではの俳句だと思う。母雀をはらはらさせるような子雀の行動が窺えるし、その子雀に降りかかる小さな紅色の楓の花が、春たけなわの長閑な景をつくっている。誰もが見過ごしてしまうような小景を、かな女の俳句眼がしっかり捉えている。（鬼之介・註）

水　明

第1099号

―華の一句―

春浅し娘杜氏の薄き紅

井上燈女

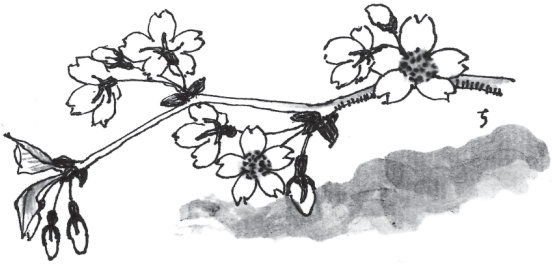
杜氏（とうじ・とじ）は、日本酒の醸造工程を担う職人集団であり、特にその集団の統率者を意味する。杜氏は親方と尊称され、引き連れて来た仲間と共に、酒蔵で秋から翌年の春まで寝起きを共にする。近年では女性の杜氏も腕を奮っているようで、本句の杜氏もその一人であろう。職業意識を心に刻みつつ、女であることの意識の表出が、薄く刷いた紅なのである。

（鬼之介・推薦）

水明

令和４年
４月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
花の宴（作品）　西山貴美子　6
春早早（近詠）　栢尾さく子　7
浅き春（近詠）　町野広子　8
風琴　※雪欄作家近詠鑑賞　井口俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　石井喜恵　石山かつ子　大橋廸代　ほか　12
季音「月」（同人作品）　宇田白鷺　大場順子　鳥羽和風　ほか　19
季音「花」（同人作品）　大塚茂子　福田千春　近藤徹平　ほか　24
現代俳句鑑賞　網野月を　28
『水明誌』を繙く　堀田季何　30



水明忌 32

水明集

横山君夫　染谷正信
渋谷きいち　ほか 35

水明集作品評　山本鬼之介 48
水琴窟（水明集二月号鑑賞）　池田雅夫 52
山紫集 56
鼓笛集（同人作品）・私の一句 62
俳誌望見　梅澤佐江 31
句集喝采　近藤徹平 54
水明通信 65
水明例会報・各地句会報 66・69
水明通信 65・74・75
全国大会のお知らせ 76
全国大会兼題句募集 77
風声・発展基金御礼 78
後記 82

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

花の宴

山本鬼之介

流れゆく雛のためらふ一の堰

人知れず文殻焚くや木の芽垣

啓蟄や漏水箇所を探る耳

克明に薔薇の芽を描く農学者

風船の蛸のはつちやん連れ歩く

上品に木の芽田楽三本目

麗日や瀞ゆく舟の艪のリズム

出世頭をかこむ宴よ初桜

春早早

西山　貴美子

アンソロジーに黄金（くがね）の枝折り春立ちぬ

丈六のあえかな笑みや春浅し

ひといろは神のしづくか牡丹の芽

春早し窓辺を過ぎる鳩の胸

抱き上げし赤子のふぐり梅の空

ももいろの猫の肉球春の雪

春早し単味珈琲まろやかに

生来の粗忽さが高じ、転んだり骨折したりで、今、ザ高住に居る。早く家に帰りたいと思う反面、三食・おやつ・昼寝付きの気安さに心甘んじている毎日である。そんな或る日、職員のFさんの肝煎で食堂の一角にカフェが開店した。焙煎のいい香り、コーヒーサイホンにお目にかかるのも久しぶり。マンデリンの深くまろやかな苦味に「コーヒーはやっぱし単味に限る」なんて呟く御仁もいて、早春の楽しいコーヒーブレークだった。

浅き春

栢尾　さく子

山の春象形文字の渓の木々

鐘供養ほこりほこりと土竜塚

藤村の詩に佇めり浅き春

若き日の母の肖像花の雲

立春の法衣はみどり風孕む

初蝶を友の化身と追ひかける

乱心の武者絵凧なり失墜す

今日迄の人生で胸に畳み込んだ箴言は夥しい。そしてその粗方は消化できないでいる。気が付いたら最晩年となってしまったが、今も自然に口遊む愛誦歌がある。

もうすぐ今日が終る
やり残したことはないかい
親友と語り合ったかい
一生忘れない出来ごとに
出会えたかい

嗚呼これも箴言かも。

風琴

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　　町野広子

◇道程（一月号）　小倉倭子

赤レンガの駅より旅の初紅葉
気ままなるリズムを踏んで草黄葉
行く先はこの道ひとすぢ竹の春

赤レンガの東京駅から出発の旅。京都方面又は東北方面へ向かうのか。初紅葉の旅への期待が膨らむ。江戸っ子で男前の気性の作者。気ままなリズムも作者独特の物であり、足元の黄葉が心地良く響く。作者の敬愛する山本紫黄師を仰ぎて三十三年、更にこの先も俳句の旅は続く。親竹も若竹も緑濃く「この道ひとすぢ」に相応しい前途ある季語である。

修飾の言の葉消して菊活ける
往年の詩心燃ゆる秋夕焼

世の全ての物事には句がある。それを賞めたり飾ったり又は強調したり。そんな言葉を胸に秘め心静かに菊を活ける作者。言わずに語る、見せずに見える余白の美である。

若かりし頃のあの情熱と詩心が、今日のこの見事な夕焼に出会った感動と共に沸き起った。作者の情熱は今も変わらない。何十年も携わっていると指折りをせずにリズムの句が生まれる。そんな作者の生涯句の中の一句。

青天に魚引く力凧上がる　小倉和子

◇玻璃戸越し（一月号）　柚木治子

仄見ゆる御舟の「炎舞」身に入むる
冬晴や翼ほしがる裸婦の像
吹寄せに見ゆる落葉の神の池

嘗て歳時記で目にした、速水御舟作「炎舞」に心を奪われてしまった作者が何十年か後に出会いの機会を得た。まっ赤な炎に吸い寄せられる白蛾は、まるで舞っている様である。

冬晴れの中清廉と佇む裸婦像に、もしも翼があればと、作者は思いを至らせる。神の池と呼ばれる処に吹き寄せられた落葉。種種の色や形が美しいハーモニーを奏でる。

見る物全て句材となる感性豊かな作者である。

冬の灯や玻璃戸越しなる美術館
「名樹散椿」デフォルメの枝や金屏風

日短かな冬の美術館には早々と灯がともる。ガラス戸越しに見る美術館は、荘厳な佇まいで中には多くの名画が保管されている。作者の心は温かく満たされて行く。

「名樹散椿」やはり御舟の作で、金屏風に描かれた椿の大木の大きく広がる枝々には赤や白は元よりピンク、紅白混りの椿が描かれ、樹下には落花もあり圧巻である。「炎舞」「名樹散椿」共に国の重要文化財であり、浅草に生まれた御舟は四十一歳で早世し、画家としては二十六年間の活躍であった。

◇落葉（二月号）　椎野美代子

落葉いろいろ落葉づくしの石燈籠
始祖鳥の振りして降りし朴落葉

五十年を経て風格ある立派な木々は折々の表情を見せてくれる。形も大きさも違う葉が色を変えて落ちる。一方で石燈籠は錦の衣を纏い楽しませてくれる。

他を圧する朴の葉。大きなそれは落ちる時さえも存在感を示す。「始祖鳥」とは言い得て妙。鳥の祖先と考えられる始祖鳥は歯のある顎、爪のある三本の指、長い尾椎（尾骨）等爬虫類に似た点も多い。落葉に埋れた庭の風情は格別である。

朴落葉踏めば化石の音がする
柿落葉一葉一葉に風姿あり
銀杏落葉眩しむほどの大往生

大きな朴の葉の落葉は、嵩もあり踏んだ時の乾いた音とその感触を化石のようであると表現。一般的には硬いイメージの化石ではあるが、ガサゴソする大きな音が化石に繋がると感じたのである。身近に見られる柿の木は、他の樹木とは異なっていると思う。先ず新緑の美しさ、初々しい若緑に目を奪われる。そして秋の落葉は、一葉ずつが多種の色を持ち、一つとして同じ物がない程に芸術的である。銀杏の大木も秋には見事な黄金の葉を天へと伸ばし、やがて庭が一面絨緞のように覆われ埋め尽くされる。残された木の梢はまっすぐ天を指し次の命を宿す。生命の交代劇である。

◇ゴトビキ岩（二月号）　大橋廸代

見上げたる龍のうろこの冬の磴
匐ひのぼる百磴までを顎マスク
追ひ越さる鈴の冴ゆるや磴半ば

和歌山県新宮の千穂ヶ峰（権現山）。この一帯は世界遺産である。その切り立った山の頂近くにある神倉神社のご神体がヒキガエルの姿をした「ゴトビキ岩」。まるで崖のような五百三十八段を見上げれば正に龍のうろこに見えるに違いない。前にご主人後ろからは娘さんに守られて進むも、一段一段匐いのぼる様子が見えて来る。息も絶え絶えでマスクどころではない。顎マスクに共感も、苦しい中の軽妙な言い回しについつい笑えてしまう。健脚の方が休憩中の三人を追い越して行くがその鈴の音に暫し癒される。山道に於ては擦れ違う時互に声掛け挨拶をし、相手を励まし敬う心が自然と湧き上がって来るものである。

春を待つゴトビキ岩に触れもして
白息や木の根岩の根女坂

念願のゴトビキ岩に辿り着き、ご神体の岩に触れた時のご夫婦と付き添って下さった娘さんの感動は、如何ばかりであった事かと胸が熱くなる。頂上からの景色は苦労をして登って来た人だけが堪能出来る。さて帰路は坂を下る。女坂とは言うものの手の加わらない自然の山路。木の根や岩の根元が足元の邪魔をして更に膝への負担が大きい。それにしても、よくぞ決行されたと、信念の作者とご家族に喝采。

硯箱

◆季音一月

井口俊晴

行く年や車灯つらなる大架橋　田寺玲子

一年も残すところわずか。あたりが夜の闇に包まれると、なんだか寂しさが募る。そんな時、住んでいる神戸の山側から対岸の淡路島、四国の方角を眺めていると、明石海峡大橋に車が連なっているのが見える。向こうから走って来る車のヘッドライト、対岸に渡る車は赤いテールランプ、それが暗い海の上を埋めて、波間に浮かぶ夜光虫のようだ。新しい年が良い年になりますように。

小面の口して葛湯吹き冷ます　柚木治子

大寒っ。こんな時は葛湯でも飲んで、体の奥から温めなきゃ。そそくさと台所に行き、買ってあった葛湯の粉末を取り出し熱湯を注ぐ。お湯の温度が低いと、とろみが出ないので注意が必要だ。カップの葛湯をスプーンで掻き回し、ふうふう冷ましながら、火傷しないよう気を付けて飲む。その様子を見ている人がいたら、うら若き女性の能面のように美しい口元を褒めてくれるかしら。

酒蔵に息づく酵母星冴ゆる　丸山マスミ

日本酒は季節を問わず一年中作られているが、冬の寒い時季に仕込まれるお酒には、やはり格別なものがあるようだ。人々が寝静まり、冷え切った空に星が瞬く夜更け、酒蔵の中には仕込み途中のタンクがいくつも並んでいて、タンク内部では、蒸米・米麹・水の混じった汁の中で酵母が静かに息づいている。ひそひそひそと、まるで声を潜めてお喋りをしているかのように。

火事近く我が不意打ちの不整脈　森川義子

「空気が乾燥しているので、火の元にはお気を付け下さい」。再三注意しても火事は跡を絶たない。一軒家が全焼し、住んでいた高齢者が焼け跡から遺体で発見された…。そんな悲し

いニュースが頻繁に伝えられる。近くで消防車のサイレンが鳴ると、近所の窓が一斉に開く。びっくりして心臓がドキドキしてきた。年を取ると、普通に暮らしていても、脈が飛ぶなどの不整脈は起きる。恐ろしい火事の不意打ちではたまったものではない。

漱石忌隣りの猫が偉さうに　　渡辺舎人

十二月九日は夏目漱石の忌日である。だからではあるまいが、隣の家の猫がなんとも偉そうにニャーとか鳴いている。もともと態度のデカイ奴だと思っていたが、きょうは特にそうだ。そして、いつの間にか我が家の縁側に寝転んで日光浴を決め込み、あろうことか顔の手入れまで始めたではないか。「吾輩」は有名でも、君はただの猫なんだぞ。

道よぎる毛虫のスピードいとほしむ　　霜中冬至

師走の道を毛虫が横切っている。なにせ小さいから、懸命に足を動かしても進む距離は知れている。自動車だって通るから、ぐずぐずしていると轢かれて潰されてしまう。思わず頑張れと声を掛けたくなる。特に毛虫が好きだと言うのではないが、生垣の葉っぱを食べていない時の毛虫は、モコモコしていて愛嬌がある。そう言えば、毛皮を着た毛虫を見て、裸の芋虫が羨ましがっているという小咄を聞いたことがあったなあ。

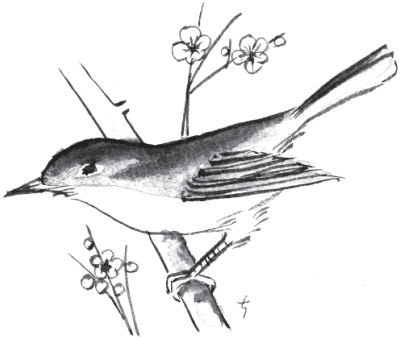
月光に瘤曝け出し冬木立　　河野はるみ

真昼のような月の光の下、野原に一本の老木が立っている。真冬の寒さに、夏の間あれだけ茂っていた葉は全て落ち、残っているのは、節くれたたくさんの枝だけ。太い幹のあちこちには大小の瘤が出来ていて、それが月の明かりにくまなく照らし出されている。美しいとは言えないが、瘤の数々は、老木がこの地で過ごしてきた風雪の重みを物語っているかのようだ。老いた木にはつらい日々だが、いつかまた、暖かな春がやって来るだろう。

客の来ぬ研屋終日日向ぼこ　　瀬戸雄二郎

正月が近くなると、包丁を研ぎに出す人が増える。一年間手入れもせず使ったので、切れが悪くなったせいだ。だが、研ぎに出すのは心がけが良い方で、たいがいは切れの悪くなったのを力任せに使っている人が多い。だから当てにした客は一向にやって来ない。研屋が陣取った店の前は、買い物客は通り過ぎるだけ。でも幸いなことに日当たりだけは良いので、親爺は日向ぼっこを決め込んだものだ。

季音雪



玉砂利　石井喜恵

玉砂利のとぎれし処冬木の芽
朝靄をゆつくりほどく冬木の芽
くれなゐは人恋ふ色や寒椿
木蒐や風に溶けゆく櫂の音
大寒の水底冥き鯉の池

春一番　石山かつ子

ゆるやかに座せば公達都鳥
波に浮く白の品格百合鷗
夜をかけて犬の産まるる春一番
片皿に乗つ込み鯛の尾が立派
山祇の眠り起こせよ春一番

風光る　大橋廸代

縄文の丘の辛夷に呼ばれたり
火焔土器の欠片ほりだし風光る
竜天に登り息づく絵蝋燭
なきがらの軽きによろけ蕗のたう
くわんおんの頭に避雷針丘の梅

早春　大村節代

唐破風の異彩を放つ浅き春
早春やエミールガレの青き壺
主義主張通す異教徒蕗の薹
ゆつくりとイエスタディを聴く余寒
好き嫌ひ合点のいかぬ猫の恋

祈願　小倉倭子

心持ち素肌に微温雨水かな
岩肌にハートの石型浮く雨水
重なりし絵馬に微光や今日雨水
跳ね上がる絵馬の「合」の字春一番
恵方より春一番の葉擦れなす

雁帰る　栢尾さく子

初蝶蝶発心の翅広げたる
人泣かす恋など知らで雛の綺羅
まだ未来ありげな手相ようず風
雁帰る背向の言葉かみしめて
果てしなき虚空に向けり帰る雁

雨水　菊池ひろこ

坂上の家々枝を張る雨水
庭先を訪ふや雨水の女所帯
陽の光ながれ雨水の瓦屋根
蹲の眩し雨水の深廂
かつて二島返還の文字下萌ゆる

遅春　五明昇

凍蝶と日差し分け合ふ縁框
永代橋いなせに渡る都鳥
節分の鬼が逃げ込む縄のれん
魚鼓を打つ僧の二の腕冴返る
雄風に公魚を汲む帆引き船

鬼ごつこ　境延昭

凍蝶に触るれば指の痺れさう
寒夕焼一人じや出来ぬ鬼ごつこ
節分の鬼をねぎらふ般若湯
鳥引くや坂の半ばの異人墓地
春寒のおでこで計る体温計

冬から春　椎野美代子

凍蝶のまどろむ息の冥さかな
凍蝶は双手に囲ふ毀れもの
凍蝶よ生死の他は絵空事
初蝶蝶魂のつもりのやう消ゆる
白昼の紋白蝶におぼれぬく

春ショール　島津初花

二百号といひて残雪光りをり
残雪や膨みきたる農事メモ
名優の仕草鏡に春ショール
ジャスミンの香り移れり春ショール
梅が香に満たされをりし水月湖

立春　鈴木康世

立春の割りし卵に黄身二つ
立春や父の形見の刃物とぐ
密やかに燃やす文あり春立つ日
立春や父の一語の今に生き
立春や下校チャイムの曲かはる

春めく　田寺玲子

料峭の潮の香つよき移情閣
春節の龍をどり込む喫茶店
「おこしやす」春めく京の石畳
三叉路の明治の石碑冴返る
辛夷咲くや光とらへて伎芸天

引鳥　十倉和子

口笛は「北国の春」辛夷咲く
暁紅や旅の目覚めの白辛夷
ひよこの声二月の土間を明るくす
野火煙り苗字同じゅう三十戸
引鳥を見し夜は言葉やさしゆうす

寒　永野史代

あらよあらよと関東平野雪の闇
鋼光りの鉄扉を叩きをり大寒
寒雀の胸のふくらみ愛ほしく
寒ゆるぶ座敷わらしの居はす蔵
あつてなきごとかたくりの花の影

待春　西山貴美子

待春や銀の酒盃に父映し
午祭り幟も父も傾きぬ
板塀の一点暗し鬼やらひ
人声の届く辺りに梅一輪
ものの芽やピザ宅配のヘルメット

春来る　波多野寿子

弾くピアノ家中に満ち春来る
人形のうなじ美し秋子の忌
嵯迷忌や絵巻の語り見て飽きず
淡雪や墨絵うすうす雲描く
料峭や胸中にある悔いひとつ

笑ひと涙　星野和葉

合はせ持つ筋力知力冬季五輪
コスチュームは青氷上余さずに
人は翼を隠し持ちたる空二月
うら返る笑ひと涙二月過ぐ
明日には答を出さう二月果つ

春よ来い　茂木和子

立春や合せ鏡に毛のほつれ
崩れ咲く花に瑞光寒明くる
春寒や土の鼓動に触れし朝
日が昇る余寒の土を宥めつつ
郷愁のすべてを繋ぐ蓬餅

春一番　矢作水尾

鰤大漁かもめ引きつれ接岸す
春一番沖へ向き立つ大鳥居
野を焼きて楔としたるこころとも
嫁ぎし娘の晴れ着もこの手針祭る
冬雷や漁火遠く濡れてゐし

冬終る　山中みどり

浅草や鰭酒に擦る箱マッチ
慰霊堂に幼らの声冬終る
駒つなぎの石と井戸端花水仙
静もれる刀剣館や鴨の陣
朝市や採れ立て野菜春の泥

籠の鳥　柚木治子

春寒し扉細目にとあるバー
浅春や石碑あるのみ庵跡
バレンタインデー口付け青き籠の鳥
目刺一連悟りの相で乾されをり
オリンピックの超絶演技目刺焼く

水辺の春

由良ゆら女

水辺より春の胎動泡一つ
乗つ込みの水音らしき胸さはぎ
エイトゆく声を一つに芦の角
郷に向く首有りつ丈鳥帰る
白魚やくつきりと引くアイライン

節替り

吉住光弥

異人めく壁画に春の呼吸騒(さう)
凍蝶や頭はブルースの薄日なか
舞ひ心ふつふつ沸き来節替り
魚板打つ木槌の音や春寒し
下痢嘔吐の地は美貌なる下崩に

宙界隈

網野月を

鳶の空包みて余す辛夷の芽
今日からは春の木となり天を衝く
春の日を見上ぐる眼細めてゐ
手のひらにちよいと載せたる春の月
月の香を捜すマネキン春恨む

☆

☆

季音月

春一番　宇田白鷺

カアと鳴き小首傾ぐる寒烏
雪起し一夜に描く墨絵かな
赤出汁の馥郁として寒明くる
足早に行く雲水や春立ちぬ
残されし靴もみがきて春一番

春浅し　大場順子

巫女舞の榊艶やか節分会
立春やまだ筆入れぬ白き画布
落葉松に触るる眉月春浅し
浅春や身を寄せ合へる野の仏
源流の水ほとばしり春動く

若狭の早春　鳥羽和風

雪解道草鞋の音に布施をする
残雪の山を仰ぎて聞く校歌
きさらぎの水抄ひたる四つ手網
雲水の前を横切る春ショール
春一番翻筋斗打つて桶走る

千の風　藤澤喜久

旅の空途方も無くて冴返る
茅葺きに山茱萸の雨黄にけぶる
紅梅の莟舞妓のうけ口に
囀りや埴輪に貝の首飾り
涅槃西風〝新井満さん〟千の風

瀬音未だし　丸山マスミ

浅春の瀬音未だし旅鞄
春浅しホットミルクに蜂蜜を
船乗り待つ女将とボトル寒き春
舫ひ解く海人の夫婦や春夜明け
命揺るがす護摩壇の火や午祭

水の輝き　梅澤佐江

寒燈と言へど寄辺となる温み
蕗味噌や人生てふはほろ苦し
余寒なほ久しき人へ片便り
梳く髪の艶増すけはひ雨水かな
末黒野を流るる水の輝けり

浅き春　井上燈女

新聞紙まるめて野火へ火を放つ
春耕や父に習へば土の声
群鳥の影落しゆく浅き春
春浅し娘杜氏の薄き紅
朝の陽にささくれ乾く蜆笊

梅日和　森本早苗

春宵の高座を沸かす男振り
日に三度訪ふ鶯の律儀かな
大願塔の九輪金色梅日和
涅槃図や悲嘆の猫の確と有り
失せ物の届きし寺や椿咲く

二月尽　松井由紀子

追伸にこぼるる本音二月尽
病み居れば子は優しうて二月尽
春浅しボトルシップの薄埃
春灯や香の佳きひととすれ違ふ
月山に会ひたくて乗る春の汽車

蕗味噌　森川義子

末黒野の熱覚めきらずはや暮色
磯馴松一気にゆする春一番
蕗味噌や地味な昭和の話など
白魚を呑みたる後につく吐息
赤い糸つけて労ふ針供養

蕗味噌　山田美佐尾

蕗味噌を訛と共に味はひぬ
ほろ苦き蕗味噌の味徳利酒
奥深き紅梅屋敷父母遠し
紅梅や大社の杜に神宿る
直伝の刀匠の火や霙の夜

如月の息　高島寛治

永劫を動かぬ構へ凍てし蝶
初午や幟立ちたるビル谷間
如月の息かけて拭く硝子窓
如月や馬の背光る競馬場
山村に新任教師春浅し

冬木の芽　内田恵子

大寒の青空シースルーのエレベーター
冬木の芽少年厚き本抱へ
冬木の芽言の葉探す街歩き
落魄の小野小町や蝶凍つる
凍蝶よ残せ天まで飛ぶ力

障子　松宮保人

読み飽きて出窓に赤きシクラメン
労りの素振りも見せぬ母の胼胝
本堂に御詠歌流る冬障子
子雀の来てゐる雪見障子かな
良縁の話し纏まる白障子

志　野口和子

浅春やうどん晒す手薄赤く
境内の玉砂利総身雪だるま
志定まりし子に春の月
兎縫ふ縮緬と紅絹針供養
鬼呼び込む鬼石の町の鬼やらひ

早天　池田雅夫

早天の光あふるる三月来
ありありと白き馬形山笑ふ
川岸の地層の露出水温む
春の野の起伏をかしや下校の児
棒立ちのノッポビル群昼霞

赤城颪　荒井倶子

「どんとはれ」で終る民話や雪女郎
公魚のプリズムめきて釣られけり
公魚や赤城颪のなほ尖る
梅花五分あまき風来る女坂
風神を道連れとして野火走る

不図　渡辺舎人

フィギュアの不図現し世に落ちにけり
蘇芳に芽朝の時報のやうに吹く
朝トレの中二生徒や風二月
探梅行そつぽを向ひて待ち合はす
雪のロケ華麗に仰のき斬られ役

春めく　井関礼子

狭庭にも春の目覚めのひそやかに
ときに射すおてんと様も春めけり
籠る身に小さき春のかいま見え
季の歩み刻一刻と春めくも
立春の句会となるも風雅かな

椿東風　川崎道子

椿東風やんはり乾く一夜干し
椿東風重なりて鳴る舟の絵馬
強東風や飛べぬ神鶏飛びたたす
辛夷咲き遠山の雪溶けはじむ
芽柳や足のもつるる美男車夫

霜中冬至

目標は大谷翔平雪合戦
鯖街道ふぐひれの酒味くらべ
河豚のつら煮ても焼いても食へぬやつ
嬶の手を小股に挟み思案顔
茶髪して恥かしうれし女正月

早春　井口俊晴

走ろうぜ早春の道胸張つて
晴れわたる雨水の空に鳶の声
節分や人それぞれに鬼の顔
公魚の甘露煮添へて朝の膳
イケメンがいない里ねと雪女

車高制限　町野広子

ベビーカーの双子すつぽり冬帽子
タクシーの出払つてゐる寒の駅
「車高制限二、六m」寒の晴れ
木に軒に丸く居並ぶ寒雀
大寒のローカル線に新車輌

鯖街道

福は内　上戸千津子

藁葺を一際浮かす花辛夷
我独り撒いて拾うて「福は内」
柏手に気魄満ちるや受験の子
焼き畑や声だけ響くシルエット
青麦にふと古里を見たやうな

土筆　西浦千枝子

紀州富士春雪被り神々し
紅椿満開と聞き旅支度
其処此処に土筆顔出す通学路
土筆野に歩の定まらぬベビー靴
春なのに御近所遠しコロナ禍に

冴返る　岡野順子

飛び翔つ鳥の腹見せて冴返る
冴返る庭の松の天辺に
この松に生を託して冴返る
林立する草木の青さ冴返る
冴返る松の青さを心中に

春の闇　松山清子

春の闇籠もれるわたし深海魚
薄氷をわざと踏み行く登校児
池の端の薄氷引き寄せ燥ぐ児等
花筒の薄氷砕き墓参り
北国の便りのにじむ春の雪

☆

☆

季音花

春駒

大塚茂子

春浅し秩父連山こむらさき
春駒の腓美し跳ぶ牧の朝
春駒の楕円の瞳すがすがし
センサーライトうかれ猫らの邪魔をする
懐に深き追憶沈丁花

薬指の爪

福田千春

春立つや爪よく伸びる薬指
窓に入る風に土の香雨水かな
かたかごやかつてをなごはしたをむき
片栗や告白いまだできぬまま
聞耳をたて何を聞くかたくりは

寒燈下

近藤徹平

逆縁を伝ふるスマホ寒燈下
異国語の飛び交ふ秘湯春浅し
小町忌や片恋今や懐しき
銀盤の接戦制し冬五輪
まづ祝詞大太鼓打ちいざ野焼

黒と黄と青そして春

河野はるみ

焼野見る黒き瞳の農夫婦
春の日やくの字の背中伸ばしをり
異国の船をながむる岬黄水仙
銅鑼の音やかすかに揺るる黄水仙
うす暗き部屋に一挿し黄水仙

雨水とや

日髙道を

真夜中の神社開手(ひらて)の音の冴え
冬寒し「幸福」行きの切符いま
雪虫の慌しさや母白寿
雪解光ひがしの茶屋の炉の香り
雨水とや越後は未だ雪の中

春めく　青木鶴城

ひと筋の雲の曳き行く余寒かな
朝東風や絵馬縦書きか横書きか
香り立つ上野の山や春兆す
春の風ちよつぴり色の違ふ義歯
春めくや人は仮寝に酔うてをり

一期一会　野田静香

職人に畳の匂ひ針供養
水温むぽつりと老の苦心談
石垣に陽をたつぷりと花いちご
紅梅や袂を揺らし結び籤
白椿一期一会の茶の香り

春夕焼　井上玲子

残照の末黒野に置くしづごころ
末黒野の夕暮寂と鳥の群
陽光に包まれ明し牡丹の芽
ねんごろに蕗味噌を練り益子鉢
平らかに一日を送り春夕焼

ゆるり　正木萬蝶

冴返る透けゆく今朝の磨硝子
冴返るリアウィンドーの乱反射
片栗の花や天使に正と悪
片栗の花や祖母には無き青春
老医師の診察ゆるり雨水かな

雨水　石田慶子

おしろいの香染み入る街の雨水かな
美容師のベストおしやれに雨水かな
なぜかしら人を集める春炬燵
やまあひの瀬音たどれば片栗の花
春の雪ペアールックの僕と犬

梅かをる　石川理恵

ボランティアあまた見守る野焼かな
お隣の紅梅の香の今日ことに
車椅子押す梅かをるところまで
春浅し端切れいろいろ散らかして
玉子焼は甘きがよろし浅き春

かな女句碑　熊倉千重子

下萌や雀待らせかな女句碑
平穏な日々来い来よと鬼やらひ
下萌ゆる土竜ひたすら道づくり
恋心芽生えし少女バレンタインの日
民宿の目刺ふつくら焼加減

春の芽生え　田中章嘉

黄色から春が芽生ゆる山野かな
首回り少し広げて梅見かな
雪解けの音も気儘に点と線
夕暮に「ぞくっ」と背筋が冴返る
観梅に次次開くトレモロが

梅開く　飛永鼓

ウィルスの世に変らじと梅開く
夢語る記憶ばかりや梅開く
梅白し湖の懐奥深し
一も良し万はなほ良し梅匂ふ
梅一枝床に客待つ面構へ

江戸前　瀬戸雄二郎

此処まで江戸前と云ふ海苔の篠
海苔掻くやディズニーランド眼の前に
風強き浜の食堂石蓴汁
床の間の能面微笑春浅し
春浅し大涌谷は熱気噴く

蕗の薹　野平美紗子

身の内に迸るもの蕗の薹
蕗の薹土に温もり戻りけり
連立ちて観梅行の吉祥寺
春寒の日差し求めて伸ぶる蔓
春寒や北へと帰る子を案じ

春寒　下川光子

早春の雫眩しき切通し
春寒し薬師堂より猫の声
春寒の礼拝堂へ靴を脱ぐ
教室の窓にイニシャル風信子
房州は爺婆達者金盞花

平和な五輪　宮﨑　チアキ

競ひ合ふ平和な五輪雪けむり
寒紅梅の異彩を愛づる北の窓
終りなき世の喧噪や春寒し
懐かしき歌で旅する浅き春
東雲や目覚め促す蜆汁

春の日　宮﨑　紫水

春の朝児童の列に歌の声
頬杖の生徒ちらほら春の午後
退勤の教師にリズム春の夕
勉学の灯りほのかに春の宵
春の夜閉ぢし書物と共に寝て

冬日　中野　彊

豆撒いて疫病去るを祈りけり
冬帽子目深に歩きスクランブル
ワクチンを打ちて安堵の冬日かな
雨が雪に変りて街の沈黙す
凍てる朝鈴をつけたる鍵の音

冬季五輪観戦　後藤　綾子

天空に飛出す競技風光る
春苺含みて勝てるカーリング
のびのびと氷上の舞春来る
春炬燵競技の判定厳しかりけり
行く春や胸の風穴埋められず

☆

☆

現代俳句鑑賞

網野月を

ヒロシマの氏神は何をしていたのか　川名つぎお

（『俳句四季』2月号・逃げ水より）

「ヒロシマの氏神」の呈示は、無力と哀訴の塊である。というよりも解説のできない無数倍の意味を含有しているようである。それが詩文の措辞であることを改めて教えてくれている。

思い切り破調の作風なのである。ただこれは、枠の中にいる者にとっての言い分であって、向う側にいる作者にとっては破調でも何でもない。形式は、有する者にとっては逸脱であり、はみ出していることになるのだが、超越した者にとっては新たに開拓するフロンティアなのである。他に「逃げ水や異文化盗り得の昭和」がある。

背を青くして枝垂れ桜の中にいる　こしのゆみこ

（『俳句四季』2月号・豆の木より）

「背を青くして」が「枝垂れ桜」を浮き立たせる存在として解釈した。青空を背景にした桜は実に見事なものである。ただ「桜の中にいる」と続くので、この「背」は作者のそれなのか？と考えたりする。作者自身が青空に同化したという解釈が成り立つかもしれない。筆者は、作者が「枝垂れ桜」と同化したとも解釈してみた。この作者もフロンティアに自身を位置させることを常にしている。

鯉はねて鋼のひかり冬泉　浅井民子

（『俳壇』2月号・さえざえとより）

寒鯉のヌメッとした触感を中七の「鋼のひかり」という視覚的表現にトランスレーションしている。上五の「…はねて」はモティーフの動作であるが、「鋼のひかり」に付随する述語は省略されていて、つまり作者の視線なのだが、結果的に余韻を残すことに成功している。季語は座五の「冬泉」に任せて、「寒鯉」にしなかった。

埋められてわが半生や蛇と眠る　堀田季何

（『俳壇』2月号・それは不思議なより）

大胆な句であり、何かを告白しているようにも、何かを告発しているようにも感じ取れる。作者にとっての「わが半生や」の表現が作者にとっては長すぎるようにも考えてしまうのは、筆者の考えすぎであろうか。他に「落書で戦　想望句雪」がある。いわゆる「戦火想望俳句」を惹起させるもの

で、挑戦的な句である。

梅林へ透明人間ばかりくる　尾崎竹詩

（『俳句界』2月号・樹の声より）

句意の濃密さと「透明人間」の意外性の語彙から、句の構成は散文的に読みやすく仕立てられている。「透明人間」は見えないという意味なのか、それとも存在感がないということなのか。梅林の見事さの前に人間の存在感の無であることを言っているようである。

雪も老ゆるかゆつくりと地に落ちて　庄子紅子

（『俳句界』2月号・鶯餅より）

「老ゆるか」の半疑問（反語）型的断定が効いている。作者の視線は、天空に雪が出来た時から地に落ちるまでの雪の生涯を俯瞰している訳ではないだろう。昔日の雪と現在の雪を比較しているわけでもないだろう。ただ目の前の「雪」に感情移入しているのではないだろうか。「地に落ち」る僅かの時間を作者は見据えて、そこに「老」を感じ取ったのである。十七音で表した世界は、作者にとって長大な時間であろうが、この「雪」にとって十七音は瞬間なのである。

妻留守のみつきよつきを米こぼす　松田ひろむ

（『俳句』2月号・妻帰るより）

不在の「妻」に対する哀願にも似た叫びなのである。作者の「妻」への想いの全て、愛情の深さ、そして一体性を直截的に感じ取ることが出来る。こうしてみると俳句は自己を癒すための文学という一面を有するものなのかも知れない。他に「御降や海坂藩に妻を置き」「妻帰りきて遅まきの初湯の音」がある。

丹田も前頭葉も黄落期　我妻民雄

（『俳句』2月号・大き耳より）

座五の季語「黄落期」とは、先ずは丹田で感じ、そして前頭葉で認識するものなのであろう。つまり感性も理性もすべてが「黄落」一色に塗りつぶされてしまっている観がある。句の構成に複雑さが無い分、すんなりと読者に入ってゆく力を有している。がそれは構成だけでなく、表現のために選択された語彙の平易さにも在るのである。作者は「小熊座賞」という結社賞受賞作家である。

疵のない空が残りし広島忌　小川紫翠

（『埼玉の文学』2021・蔵の窓より）

作者にとっての戦争に関しての記憶もしくは思いは「空」なのである。作者の経歴については存じ上げないのだが、座五の季語「広島忌」に導き出される戦争と原爆への作者個人との関係性が残された「空」に集約しているようだ。自分には「疵のない空」を残して貰ったのだという作者の感謝の想いすら感じ取ることが出来る。真摯に作句することに向き合うとこういう句が出来るのである。

『水明誌』を繙く（水明二月号）

堀田季何（『樂園』主宰・現代俳句協会幹事）

借景は天の香具山初写真（五頁）

山本鬼之介

難解なところはない。「初写真」の一物仕立であり、句意も「天の香具山を借景にして初写真を撮りました」と、明快である。その上、一通りのリアリティもある。現実の情景として読めるし、実際に、天の香具山（天香久山）は奈良県に実在する山であり、山を借景に初写真を撮るのは十分に可能だ。しかし、どこか怪しい。

よく読むと、全ての言葉が虚であることに気づく。第一に、季語の「初写真」であるが、現在は春夏秋冬に属さない新年の季語であり（昔は春の扱いであった）、また、一年で唯一のハレの時期でもあり、「初」を冠して季語になることで、写真は虚の性格を帯びる（ただの写真とは違うのだ）。第二に、写真そのものが被写体から発される光線を再構成した像であり、虚に属する。第三に、句中で明示される被写体は借景だけで、それは借り物の景色という虚である。第四に、天の香具山も、ただの地名でなく、持統天皇や柿本人麻呂に読まれた歌枕であり（句中の表記も歌枕の通り）、それゆえ虚である。

そう、四重の虚を持つ句自体が初写真の体なのだ。

朴落葉踏めば化石の音がする（六頁）

椎野美代子

まず、朴落葉を踏む音に着目したのが好い。落葉踏む音を描いた先行句は少なくないが、朴落葉の場合、その大きさが手伝って、一枚だけ踏んでもそれなりの存在感のある音がするからだ。先行句の多い楓や銀杏、桜の落葉では枚数が欲しくなる。

次に、化石の音という喩が実に面白い。それも、二つの意味で面白さがある。一つは、化石そのものは音がしないのに、化石の音というものが想像できることである。実際に、化石の音を描いた音楽が存在する。サン＝サーンスの『動物の謝肉祭』という組曲の第十二曲、文字通り「化石」という曲で、聴き手は、ああ化石っぽいな、と一瞬で納得してしまう曲である。つまり、この曲の存在が証明しているように、化石の音は無理な喩ではないのだ。もう一つは、朴落葉と化石の関係性である。考古学では、植物の化石を植物遺体と呼び、葉の化石も含まれるが、その状態になれる葉は僅かである。朴落葉は、まずは植物遺体になれない。土に還る。でも、還る前のこの時に踏めば化石の音がする。その玄妙！

俳誌望見

梅澤佐江

『かびれ』　令和四年一月号　通巻一〇八三号
主宰　大竹多可志　発行所　茨城県日立市

昭和六年三月、大竹孤悠が日立市で創刊。師系矢田挿雲。「生活即俳道を信条に、有季定型の季感詩で生きた証を詠む」を理念とする。（月刊）

主宰詠「令和三年初冬」八句より

三冬や知恵が無ければ生きられぬ

中七の「知恵が無ければ」の措辞に達観した諧謔を感じる。孟冬、仲冬、季冬の三ヶ月間、物事の理を悟り、心迄凍えさせぬよう柔軟に生きる術を発揮して、心豊かに遣り過ごしたいものであると。

コロナ禍や大東京の神の留守

季節的にも荒寥たる十一月、コロナが猛威をふるう大東京には、頼みの綱の神さえも出雲の国へ旅立たれて留守とは何とも虚ろな十一月、「大東京」の誇張が脅威を誘う。

石蕗咲くや風の眩しさ目に沁むる

初冬、濃い黄色の石蕗の花が風の吹く度に眩しく揺れてハッとさせられる。黄色は心に灯を点す希望の色。仏教には「自灯明」という言葉があるが、この花を観ていると、出口が分からないような暗闇の中でもしっかりと自分を受け入れ、自分を信じ、心の灯を見つめる姿勢を教えられているようである。「風の眩しさ」の逆説による俳味。

終活をせねばならぬと芭蕉の忌

芭蕉は「野ざらし紀行」で西行の足跡を追い、旅を死出の覚悟の旅としたが、作者も俳句という旅を通して命の証を詠んで来られた。生き生きとしたセカンドステージの為に、自身と結社の今後の有るべき姿を模索している作者である。

木の葉散る少し重たき全句集

木の葉の散るさまやその音には哀愁が漂うが、木の葉と全句集を「少し重たき」と対比させている。第七句集「空空」に至る迄の句集全てが、作者の生きて来られた人生そのものから湧き上がる生きた証としての情感を紡いだ重みの「少し重たき」なのである。沁み沁みと共感を覚える。

光音集　同人　二一名　各七句より

中秋やシナモン強きビスケット　羽場桂子
稜線を染むる夕日や花芒　宮本恭子
涼新た百幹の竹韻き合ふ　伊藤愛子

碧雲像　同人　二八名　各五句から六句より

へぎそばに新酒もよろし夜の越後　川幡信行
かなかなの止みて気まづくなりしかな　岸井まゆ
一つのみ異なるボタン秋湿り　菊池幸恵

大竹多可志主宰が一ヶ月一〇〇句、年間一二〇〇句、一〇年で一二〇〇〇句を目指す特別作品「千日回峰」序曲（71）、二〇二一年一一月は七一ヶ月、七一〇〇句目のお句を拝読させて頂き、旅先や日常の風景、出来事を洞察し、心中深く取り込んで読まれていて、俳句と向かい合う真摯な姿勢に圧倒されました。

水明忌

去る二月二十六日に予定されていた第四回水明忌は新型コロナの蔓延により会場に集まっての句会は中止となりました。
しかし、「鶯」または「当季雑詠」の一句を献句して誌上において「先師の忌を修す」事になりました。

鶯のもう一声を待つ離れ　山本鬼之介
代々の主宰の写真歌詠鳥　青木鶴城
庭先に降りし初音や床の中　秋谷風舎
老木の幹を敲くや嵯迷の忌　網野月を
鶯やピアスの光るアスリート　石井喜恵
凭れあふ他なし今朝の霜柱　石山かつ子
鶯や十和田湖わたるコロラチュラ　井上玲子
法華経を鶯唱へ佳き日かな　井口俊晴
桜湯にひとすぢの恋ととのひし　梅澤輝翠
今ひとたびの鶯の声聞かまほし　梅澤佐江
産土の札所一番初音聴く　大塚茂子
鶯のこゑに瑠璃ます山路かな　大場順子

落款の朱の右流れ二月の忌　大橋廸代

鶯鳴くも師の叱正かと心急く　大村節代

鶯に銀輪停めて耳立つる　岡田宣子

鶯の初音待ちわび山支度　奥山粉雪

天上より吟詠響き百千鳥　小倉倭子

鶯や冴え渡る声幸のせて　小田美智

若鶯こゑ外しても森清く　河井育子

峰近し最後の難所にうぐひすの声　川島夕峰

音階の日増しにふゆる鶯や　河野はるみ

も一人の俺が静かな初鶯　菊池ひろこ

川岸の鶯の声朝明くる　木村るみ子

鶯や声に個性のひかりをり　越田栄子

鶯や梢跳ね上げ飛び立てり　小林京子

鶯の声音の育つ木曾五木　五明　昇

鶯や札所に祈る前座歌手　近藤徹平

はらからに鶯笛の上手下手　境　延昭

奥多摩の藪漕ぐ先の初音かな　渋谷きいち

待ちわびて空に飛び出す梅真白　菅原真理

ほら貝を吹くよに鳴きぬ鶯や　杉浦理恵

うぐひすの声に目覚むる奈良の家　鈴木敦子

鶯は幸せさうに囀りて　鈴木智子

春の雨「袂が濡れるではないか」　染谷正信

鶯やアナウンサーの朝の声　反町　修

初音聞く旧友訪ね来る予感　高島寛治

暁光の摩耶天上寺初音かな　田寺玲子

転た寝に鶯の声目覚めして　田中章嘉

残雪を縄でしばりし靴渡る　西幅公子

鶯の初音に染まる調神社　野田静香

初音聞き思ひ新たに水明忌　日髙道を

山茱萸や卵を産みて鶏(かけ)が鳴く　保坂翔太

歴代を称へ一声匂鳥　星野和葉

棟上げの槌音に和する初音かな　曲淵徹雄

角ひとつ違へて出逢ふ夜の梅　正木萬蝶

静止画のごとく添ふ鷺春の川　町野広子

くり返しリハーサルして発つ初音　松井由紀子

隠し湯に鶯を聞く甲斐の里　丸山マスミ

闇破る激しき騒ぎ猫の恋　宮﨑チアキ

鶯の声鳴き止みて座禅堂　村杉清吉

枝揺るる鶯の聲高くあり　元田亮一

鶯は古地図の里を訪ねゆく　本橋稀香

鶯に応ふ口笛旅の空　森川義子

うぐひすの来訪朝な夕な哉　森本早苗

立春やかもめ飛び交ふ大漁旗　矢作水尾

鶯や初鳴きの如我も詠み　山崎真由美

鶯や熊野古道の仏たち　山田美佐尾

梅白し喃語さながら開き初む　柚木治子

薔薇の芽を励ます雨滴ときに楯　吉住光弥

秋子・嵯迷・紗一・光二やすらかに　編集部

山本鬼之介　選

水明集

樹齢いま二千年余の冬芽かな
キャンパスの楡の大樹や冬芽満つ
旅行誌に付箋をつけて春を待つ
春待つや巣籠りに堪へ早二年
三陸を往くや寒星ひしめきて

上尾　横山君夫

冴ゆる灯や稽古帰りの吾妻橋
丁半で占ふ老後桜鍋
三三九度の記憶仄かに屠蘇の盃
新弟子のぶつかり稽古冬木の芽
恙がなく禁酒十年屠蘇の酔

さいたま　染谷正信

過疎村に男子誕生初霞
けふもくる祖母の絵手紙はつがすみ
血痕は悔し涙の寒稽古
三寒四温十八番は「十九の春」
曇天に朱鷺色たしか冬の佐渡

さいたま　渋谷きいち

行幸の碑文の掠れ初霞
寒鰤の競りの掛声指の振
冬の暮客待ち顔の占ひ師
炬燵猫特等席を独り占め
冴ゆる夜や路地に遠のく下駄の音

村杉清吉

寒鰤や回転寿司の金の皿
幸運の女神降臨初句会
繁華街柳の下の占ひ師
師範宅虎の屏風の迎へけり
初風の草木を撫づる地の息吹

反町　修

山眠る未知なる力蓄へつ
しきたりの薄れゆきたる三が日
小さき児のどたばた喜劇三が日
踏み締むる大地の軋み月冴ゆる
尖りゆく峡の氷柱に山気満つ

熊谷　越田栄子

雪庭に月今有るものを照らしをり
寒晴や連山抱き慈父のごと
寒晴の空に溶けゆく樹々の枝
白壁の家並琥珀に日脚伸ぶ
秩父路の香り満ち満つ蠟梅林

さいたま　山岸久美子

青木の実一緒に嫁して金婚式
帯を解き白足袋脱ぐや青木の実
背にある視線紅引く初鏡
我先と女系家族の初鏡
ロードショー跳ねて連れ立つ雪明り

梅澤輝翠

こんなにも長き根つこの仏の座
風花に青春の日々巻き戻す
初鏡それにつけてもよく八十路
大寒の空へ煙を町工場
風花や越えて来るかな五竜岳

西幅公子

冬ぬくしベンチ陣取る番鳩
北へ行く貨車の軋みや冬深し
初雪や陶の狸が薄化粧
風花や撮り鉄屯するホーム
潮騒の岬に群るる野水仙

笹本啓子

珈琲とポインセチアとソクラテス
買初や色を違へし朱印帳
初夢や漠に喰はれたかもしれぬ
リモコンを探す左手寝正月
ときめきは隠してバレンタインの日

若狭　檜鼻ことは

かしましく声を掛けあふ初鴉
駅伝鼓舞し鳶二日の大空を
スマホ向けたる作者不詳の雪達磨
懐かしき役者三日の時代劇
凄まじき碧初夢の月の色

平塚　丸屋詠子

寒鰤の照りを並べて売る女
劇場を出れば現よ月冴ゆる
切り身でも弾む寒鰤もらひけり
幸せと決めてしづかに七日粥
湖の一角占むる鴨の陣

さいたま　橋本京子

車窓よりぐんぐん迫る初筑波
賽銭の音重なるや初御空
初東風に梅が枝餅の匂ひかな
細君の豊かなる腰嫁が君
キャッチボール転がる先の初景色

元田亮一

寒風やシャッター街の頑固鮨
番犬に引き戻されて寒椿
甘え子の一礼凛と寒稽古
泣き虫の拳突出し寒稽古
初雪や三味の音微か向島

さいたま　新　暦文

三が日子の温もりにかこまれて
平安がむしろ不安の三が日
軒つらら窓辺に無垢の光降る
受験児の部屋の日めくり今朝の春
冬の月さらしぬかれた余生見る

熊谷　神田治江

漸くに主婦の座譲り三が日
手ばなせぬ母手作りの絹蒲団
軒氷柱幽かに人の気配して
大革の一打ちカンと冴え渡る
切り岸の不動氷柱の剣をもち

高崎　原田秀子

天井まで人工樅の木クリスマス
今夜だけクロスビー聞くクリスマス
障子戸に映る角なき鬼の影
天を切る笛の音高し寒稽古
江戸褄のめでたき裾や初霞

さいたま　新井孝麿

下町の屋根に十字架除夜の月
手品師に託したき世ぞ去年今年
大仰に啼いてみせたる初鴉
衝立に孕む胆力達磨様
生牡蠣をごくり女の喉仏

さいたま　曲淵徹雄

冬木立避暑地の門の堅く閉づ
冬木立昼月搦め捕らむとす
夕日いまデクレッシェンド冬木立
夕日浴び兵馬俑めく冬木立
絡まれて点されて夜の冬木立

本橋稀香

漁師らは潮のにほひ日向ぼこ
破線どほりに切れぬ鋏や雪催
冬満月双子両手に露天風呂
静御前を辿るみ吉野葛湯呑む
そんなことかと破顔一笑おでん食ふ

保坂翔太

風冴えて朝日に染まる富士遥か
冴ゆる夜や部屋から漏るる笑ひ声
寒鰤をつつく居酒屋意気上がる
幸せを運ぶ笑顔や寒の明け
幸せは熱き湯の中冬露天

千坂平通

石蕗の花行きも帰りも同じ道
孤独なり深山は赤き寒椿
点滴や闇をつらぬく昨年今年
天窓に暁光差せば立つ淑気
富士は確と雲の棚引く初茜

さいたま　加藤でん治

寒夕焼淋しき木々の輝けり
鎌倉殿も愛でしか菰の寒牡丹
降る雪よ脳裡に里の雪の嵩
兄の目の行き先追うてかるた取る
二家族子らが決め手の歌留多会

斎藤みよ

七福神を巡る谷中に風花す
再開発の町を清むる風花ぞ
手になじむ萩のぐい飲み冬深む
冬深む雑木林の餌の台
横町の昭和の香り花八手

竹澤和子

円盆に瓦礫の山の鏡割り
京の寺円窓透かし雪景色
明るさに少し寄り道日脚伸ぶ
寒燈や絵蝋燭揺れ奥飛騨路
寒雀スカート丸く子が座り

清水桂子

初霞山の吊り橋呼び覚ます
水盤を溢るる水や初霞
老いの身へ面打ち厳し寒稽古
頂上へ祖母の手を取り初日の出
佐渡おけさ習ふみちみち福寿草

さいたま　篠崎紀子

野も山も草木の冬芽気力満つ
日の光日毎に明し春を待つ
待春や衣類の整理始めをり
一月の満月地球包むごと
オリオンが満月連れて空を行く

春日部　仲田利子

初鏡眉だけ書きてマスクせむ
初鏡喜寿の姿をありのまま
トランプの婆を手の内初笑
新しき人の来たるや初句会
「マネキン」の句集届きし雪の朝

若狭　山﨑郁子

たまさかに屠蘇酌み交す三世代
道真中どいて下され寒鴉
寒夕焼東へ向かふ赤き船
打つ手なし遂に決めたり寒の灸
去年今年五年日記を読み返す

伊予　向井章子

箱書きの墨のにじみや福寿草
弓を引く白き二の腕寒稽古
土に帰す六歳の小さき霜柱
ランドセルぬしなきままに冬銀河
気の抜けしアリアを唄ふ初鴉

新年の抱負「己の身を守る」
老の春黄泉にもあらむ路線バス
菩提寺の七福神に初詣
影大き皇帝ダリヤ霜の庭
初鴉庭の片付見てをりぬ

初化粧茶会の友の顔浮かべ
俎板に溢れんばかり雑煮の具
見下せば町はモザイク冬深し
風花に生まれ在所を問うてみる
冬深し庭の立ち木は黙を決め

オルゴールぎこちなく止み山眠る
工事場の足場もろとも山眠る
盆鉢の栃の冬芽に巨の構へ
銀盃の寿浮かせ屠蘇の酔
休日の校庭開放冬木の芽

さいたま　池田珪子

杉戸　佐々木史女

さいたま　菅原真理

森美枝子

読み飽きて反古の栞を初時雨
街角のカフェの灯や初時雨
彼を待つハチ公前や初時雨
残照の海静かなり枇杷の花
仲違ひ淋しさつのる枇杷の花

年賀状だけのつき合ひ六十年
風花舞ふ能登朝市の活気づく
視野検査終へし窓辺のシクラメン
年賀状寅のイラスト猫に似て
本の背に薩摩糸びな立てかくる

大利根川の時空を超ゆる冬日かな
冬夕焼車列を染むる利根川の橋
熱燗や半世紀前の恋のこと
虎落笛吾が骨の鳴る音がする
大寒の肌理ひりひりと玻璃の罅

黒牛の太き尿よ日脚伸ぶ
円座の媼小声の囲炉裏端
勤行の般若心経日脚伸ぶ
「田子の浦」ひとつ覚えの歌留多取る
袴の裾へ撥ね飛ぶ札や歌留多とり

さいたま　後記朝香

田中泰子

霜多光代

飯田忠男

三国志閉ぢて寝際の玉子酒
同胞は敵なりけり花歌留多
日脚伸ぶ猫に貰ひし大あくび
日脚伸ぶ暦に旅と大書せり
春を待つ畑に靴跡大と小

故郷がすまして見ゆる雑煮かな
読札や脳裏に霞む「有為の奥山」
歌留多読む古典教師の咳払ひ
重石とれ漬菜ゆーらり日脚伸ぶ
春を待つ街にショパンの円舞曲

凍空を指差す像の渇きかな
湯ざめして都会の闇を見下ろせり
息白し今ここにゐる新しさ
吾の嘘吾より離れて惑ひたり
人知れず血を流す子や水仙花

八咫烏春を言祝ぐ社かな
人形で穢れを祓ひ初詣
一万の歩数を課して春待てり
特注のとんがり帽子冬芽笑む
冬芽なべて小さき円錐夢孕む

伊奈　菅原卓郎

越谷　阿部幸代

さいたま　吉川拓真

春日部　諏訪サヨ子

古マフラー一目一目に母の癖
今ならば「ボレロ」の沁むる夜半の冬
鷹を見上ぐる子等の瞳に空の青
天を衝くメタセコイアに月さやか
さりげなき笑みの出迎へ寒椿

取札を卒寿の母の諳ずる
冬萌や「売地」の幟新しき
冬萌や吾子は二本の足で立つ
駅伝や若人の息立ちのぼる
午後はまた酒肴めでたし四日かな

船欠航佐渡初風の波飛沫
娘らに誤嚥気遣はるる雑煮
カット失敗ざん切り頭で春を待つ
福詣の最後の朱印五時の鐘
こもりびと足取り重き初詣

頂上のモツ煮旨ましや初筑波
初筑波登山仲間や今いづこ
退屈なねこ呼びませうか嫁が君
初春や添ひ寝の孫といつまでも
春立ちぬ暦ばかりが何故すすむ

草加　外村紀子

さいたま　小林京子

北出久美子

川島夕峰

日向ぼこ双子の嬰の虫笑ひ
裏木戸に花柊の香放つ
冬の陽の馬の睫毛の長きこと
山宿の格子戸のごと長つらら
山門に一礼仕事始かな

川崎　鈴木玲子

去年今年銭を吸ひ込む賽銭箱
冬萌や枕木緩む廃線路
正月の鳩は道路に立ちにけり
女正月三代つつく煮ばうたう
号砲に地球震へる冬日かな

さいたま　秋谷風舎

団長は火の見櫓に布団干す
打ち直しの父の形見の布団干す
議事録の残せしままに三ヶ日
目立ちたる夫の白髪よ三ヶ日
インターフォンやけに静かな三ヶ日

東京　飯室夏江

新年の真白き暦夢紡ぐ
冬萌の緑気づかす朝日かな
晩鐘や透ける枯野を通り行く
雲開き迎へられたり伊勢詣
煮凝りや溶けてそろりと箸を逃ぐ

さいたま　奥山粉雪

冬深し息白白と朝の部屋
富士五湖に富士の雄姿を冬深し
町角の焼藷の香につい一個
髪結うて寝つけぬままに初鏡
風呂上り初化粧して御膳立て

さいたま　小川洋子

待春の淡色の空風優し
弾く人のない駅ピアノ春いまだ
二重跳び見守る笑顔春近し
蝋梅の香り生命力溢る
香をよけて愛づる蝋梅窓越しに

鈴木敦子

裏白や工場の事務所活気満つ
裏白や木の香漂ふ子の新居
怒号飛び津波の寄する冬の闇
寒林や西洋館の赤い屋根
母囲み笑ひ止まらぬ女正月

岡田宣子

初弾や行進曲を勇ましく
転職の子に寒卵こんどこそ
寒林の抱く命の胎動や
寒林や園児の声が透き通る
初鏡隠れてビューラー借りてみる

吉川　杉浦理恵

天守から水の都を冬深し
手の平で消ゆる風花いとほしや
真打の見事な話芸小正月
夜更けまで続く家族の花かるた
日脚伸ぶ何時まで続く立ち話

さいたま　野村美子

初茜松生くる水汲みに出る
初筑波日の出は富士に勝りをり
たをやかに年を重ねし初筑波
立ち生けの松厳そかに年新た
迷ひなき筆の運びや初硯

岡田芳春

少し開く窓より寒を部屋に入れ
平凡な小庭見直す今朝の雪
思はざる小庭に二羽の寒雀
波の花真横に走る能登岬
ビル風や四階にまで落葉舞ふ

川村　治

裏白やズームで囲む祝膳
歯朶反るや四十七年共に生き
ほんのりと紅さす昼間女正月
年経ても映画の繋ぐ笑初
初富士や裾野も澄みて輝けり

小駒さち子

通院に骨身砕くる寒気かな
掃き寄せて絡みの解くる落葉かな
木守柿狙ふ鴉を睨みつけ
手袋の温もり握り散歩道
カピパラのごとく柚湯に浸りけり

さいたま　水野興二

初場所や声朗朗と立行司
新年や移り住むたび四散の書
寒き夜は遠き子の名を呼んでみる
級友の一人また欠け寒の星
宝船敷く話など老の宿

横浜　山岸弘子

百万本の水仙香る爪木崎
水仙の香り仄かに歯科医院
渋る子にぽんと背押す寒稽古
摺り足の指先真つ赤寒稽古
寒稽古終りの礼の拳かな

さいたま　森　和子

無人家の破れ障子に猫の顔
プロポーズ捧ぐる花や冬薔薇
食卓のコップに一輪冬薔薇
大空に吾子と凧揚初挑戦
初めてやスマホに届く年賀状

武田重子

明け暮れの冬満月や新都心
鉄塔の三羽が唱和初鴉
初場所や関取飛んでたまり席
愚痴並ぶ賀状の友は傘寿なり
微笑んでラジオ体操明の春

さいたま　鈴木藻好

四日はや帰り仕度に母の黙
はらからと清酒酌み交ふ去年今年
嫁して初母の手をとり初詣
初富士や清貧は死語如何に生く
筆圧のより弱き師の年賀状

山戸美子

少年の眸かがやく寒稽古
三歳児走り廻りて寒稽古
甲高くひと声放ち寒稽古
寒風や髪が逆立ち獅子のやう
胸隠し初風呂の椅子番を待つ

鳴海順子

真先に虎の親子と注連飾る
枝先に幸せをよぶ冬桜
冬麗や窓を開くれば銀世界
寒日和快走ランナー箱根路を
蠟梅や静謐な香の氷川杜

遠西勢津子

代々の雑煮のレシピ嫁ぐ子に
豪華なる嫁のお節や子の笑顔
冬深しさくさくさくと庭歩く
風花に温泉街の夕べかな
風花に負けじと走者猛ダッシュ

さいたま　森下美智枝

デイサービスの空気やや寒む句に集ひ
「デイ紅白」の両組勝ちと年暮るる
窓際にストーブ寄せて舞ふ雪を
小走りの佐川の兄ちやん雪を来る
糸電話の端持たされて日向ぼこ

和田仁八郎

門ごとに松を立てゆく鳶頭
煤払ひ脚立から見るわが住処
風に立つ一本松や春を待つ
早暁に肩先ひやり春を待つ
石の牛ただ瞑目し春を待つ

東京　山中いちい

風邪に寝て氷枕を嫌がる子
子供等の生き生きとして氷割る
玄関に一輪挿しや水仙花
水仙の強さ優しさ我も欲し
早朝の電車の音や去年今年

さいたま　高原和子

お帰りと迎へてくれる嫁が君
あかね空遥かに望む初筑波
流れゆく雲より出づる初筑波
独り居や嫁が君との語らひを
寝ることに心解きけり小正月

さいたま　鈴木香音子

歯朶飾る父の背中の曲がりをり
風車祭を祝ひし父が歯朶飾る
女正月山頂からの初滑り
年賀状絵記号の虎牙光る
新春の空スカイツリー聳え立つ

木村るみ子

未知の夢ぎゆつと詰め込む初暦
名刹の長き回廊白障子
朝日中水浴びせはし初雀
朝ぼらけ障子に揺るる笹の影
オルガンのもるるチャペルや冬薔薇

湯浅　和

亡夫在らば白寿の柚子風呂香りたつ
箸置きは狭庭の千両祝ひ膳
寒スバル螺鈿輝く亡母の櫛
笹鳴や日記を俳句の糧とする
お持たせの干藷分け合ふ茶の稽古

藤沢　小島喜代子

父の年越えて喜寿や初観音
気の合はぬ奴と挨拶買初め
雪解や八百比丘尼と会ふマンホール
榾の火や鉄砲打ちの自在鉤
雪解や出世魚の面構へ

若狭　松島寛久

早朝の枝に並びて寒雀
七草のかゆの器よ湯気のたつ
冬木立誰を呼ぶのか風の音
水仙も小石もち上げ花芽かな
山頂の臘梅香る昼さがり

鬼石　加藤ナヲ子

山の辺の仏のごとし野水仙
大淀の風一身に冬木立つ
軒先のぽつてり灯り木守柿
ふくらみて淀を望むや初雀
荒波や毬の軽ろさに冬の鳥

大阪　飯塚智恵子

全天に雲なく青し大旦
虎柄のドックポンチョや初詣
神棚の歯朶カールして静かなり
ほつこりと一服の茶や切山椒
手にすればきつと壊るる初氷

さいたま　綿貫ひさの

寒晴に振袖の花開く朝　川口　田村福美
臘梅や宝登山の香をなつかしむ
寒晴の続くを願ひ野菜干す
寒晴やただ果てしなき空の碧
ほのかなり臘梅匂ふ朝の道

歯朶の反り正し御神酒を奉る　さいたま　横山礼子
世話物の男みなくづ女正月
聖堂にオルガンを聴く女正月
女正月谷根千あたりをそぞろ行く
日脚伸ぶ部活帰りの声高し

青空に割烹着舞ひ女正月　樋口元美
女正月笑ひ上戸の家系かな
信号の青ばかりなり初車
歯朶群れて覆ひつくせし庭の隅
裏白の日ごと日ごとに縮れたり

初御空青白き鳩に出合ひけり　東京　柳父はる
七種のみどりやさしく掬ひけり
「元気です」字面あふるる賀状受く
輪飾りの誇らし気なり三輪車
極上の独り頂く初湯かな

年新たマスクして聞くコンサート　和歌山　南條きわゑ
今年こそ会ひたしといふ年賀状
知らぬ子に抱つ子をせがまれ初詣
以心伝心トーンの高き初電話
福笹を持ちて寄りける友の家

クリームのドレスが似合ふ冬苺　さいたま　石浜悦子
粉雪舞ふ天の女神のため息か
冬いちご乳吸ふ赤子ぷくぷくと
師走の虹孫を抱きて子守歌
シャンパンのポンといふ音年新た

「押されて泣くな」子供元気に寒の路地　宮代　関谷多美子
若女房元気に寒の厨事
良き一年祈り囲むや雑煮膳
室の花天才棋士の言葉善し
新春光己の道に幸せは

枯木立小鳥の古巣あらはれり　鬼石　榊原聰子
凍空や散歩をせがむ犬のをり
腰痛のいようづきて寒の入
冬休みスマホのテレビ電話来る
輝やきのあふるる初日合掌す

嫁が君蘊蓄たるる米の味
午前様もう寝なさいと嫁が君
襟巻に一喜一憂かよひ道
精進湖うきの動かぬ余寒かな

草加　持永喜夫

丸餅の父の好みし白雑煮
林立すビルの谷間の初日の出
年ごとに枚数の減り年賀状
凧揚げの父子を見守る爺と婆

東京　畑宮栄子

「エイエイ」と突き出す拳初稽古
コロナ禍の賀状結びに会ひたしと
寅年の虎に咬まれし初ニュース
初夢や勤めし頃のミスばかり

水落守伊

三が日出羽三山の法螺の音
再会を込めし葉書や三が日
朝ぼらけ蒲団被りて続く夢
一升瓶の底の見えたり三が日

さいたま　緒方みき子

水仙の白をつないで散歩道
去年今年積み残しこと多かりし
爪木崎海へ落ち入る野水仙
去年今年氣高き富士に真向ひて

山下ユリ子

雑煮餅土地のしきたり丸・四角
金髪で耳にピアスでお喰積
初句会先達の句を手本とし
オリオンの光零るる鎮守杜

さいたま　小山敦子

軒下の干大根や日々に痩せ
屠蘇の香に夫の温もり背に感じ
墨の香を浅く吸ひ込み筆始
宅配に手編のセーターペアルック

和歌山　嶋田洋子

初日の出刻一刻の美しきこと
天を突くメタセコイアは雪の中
寒稽古響き合ふ声空高し
朝日受け霧氷きらきら指の先

さいたま　福田育子

寒稽古リトルリーグで勝負する
寒稽古気合で塩撒く十両か
水仙も抜かれて哀れ二度三度
寒稽古雑な足音あの児かな

落合和枝

蕩けさうな顔のカピバラ初湯かな
ゆりかもめ客足とだゆ屋形船
ピロリ菌を除去するパック福寿草
コロナ禍の一夜かぎりの寒柝ぞ

和歌山　髙橋満耶子

夜廻りを終へて夜勤へ急ぎけり
数へ日や夜更けの甘き養命酒
彼の世から尼の激飛ぶ初暦
新調の椀の花紋よ今朝の春

針起し私サイズへ亡夫（つま）の服
夫の忌はいつもおだやか木守柿
冬茜ひこうき雲を光らせて
残雪と山小屋風呂のドラム缶

初筑波ゴールテープを破る君
嫁が君大黒様に恵比寿様
雪掻きに間に合はざりし寝坊かな
初筑波藁納豆に醤油かけ

ライラック摘みて十五になりにけり
楽しくて赤白黄色チューリップ
思ひ出はセロハンの中霞草
失敗は人間だもの木瓜の花

蝋梅やほのかなかほり深く吸ふ
迎へ花蝋梅挿して輝けり
春近し膨れる蕾天を衝く
花殻を除きて春を待ちわぶる

大阪　遠藤人美

さいたま　安藤みえこ

山川　順

所沢　関根千恵

☆

☆

さいたま　小田美智

登頂やらうばい撮りて笑みし顔
浮きは良し棹を点検春近し
ボール蹴る紅いほつぺた春隣

濡れ歯朶の葉先を使ひ玉あそび
うら白や飾る作法を子や孫へ
寒椿挿す一輪の仄明かり

さいたま　村山八千代

糸井キヌエ

作品評

山本鬼之介

樹齢いま二千年余の冬芽かな　横山君夫

巨木と言えば真っ先に鹿児島県屋久島の屋久杉の名が浮かび、その中でも最も有名な縄文杉の名前と想像を絶する姿が迫ってくる。観光地の由緒ある神社で、千年杉とか千年松とかのいわゆる御神木に出合うことがあるが、それほどの驚きは無い。ところが、樹齢二千年余となると、俄然その思いが違ってくる。千年と二千年では想念的に実に大きな違いがある。歴史上での人間として、千年前の人なら話しかけることが出来そうだが、二千年前の人となると、声を掛けることすら出来ないような気がしてくる。巨樹に対しても同じような思いを抱くのである。

作者が、或る場所で樹齢二千年と伝えられている巨樹に出会い、幹の太さと樹高に驚異の目を走らせている。そして、この大樹を介しての悠久の時の流れに心を宿しているのであるが、ふと目に触れた冬芽によって、二千年という時が一気に縮まった気がしたのである。

冴ゆる灯や稽古帰りの吾妻橋　染谷正信

その土地柄からして、稽古の種類を連ねると、日本舞踊・三味線・生花といった日本的なものかと思うが、筆者としては、土地柄から半玉や芸者に直結する稽古事と解釈したい。冴ゆる灯は、冬の陽が早々と傾き、それを待っていたかのように橋や店やビルなどに点く冴え冴えとした冬の灯で、これからが昼間とは違った夜の浅草の始まりなのである。

今月も作者の粋な句に出会えて嬉しかった。

過疎村に男子誕生初霞　渋谷きいち

近代における我が国での出生率の低下傾向や、若年者の都市への流失などを原因として過疎地化が増えていると言う。そのような土地に、新しい年の夜明けとともに赤子の産声が聞こえてきたらと思うと、実に神々しい気持になる。立ちこめた霞を突き破る勇ましい男神の雄叫びである。

冬の暮客待ち顔の占ひ師　村杉清吉

歩道の街灯の下で、仄暗い灯を点して蹲っている占い師。通る人々は忙しそうにその前を通り過ぎて行く。時折上げる顔は無表情であり、また、世を拗ねているようでもある。果して、他人の人生を占う能力を持ち合わせているのか否かも

疑わしい人物に誰も近寄らない。淋しい冬の暮の景である。

寒鰤や回転寿司の金の皿　　反町　修

一昨年の春以来、コロナ禍の関係もあって回転寿司との縁が薄くなっている筆者であるが、「金の皿」は、皿の周りに金色の縁取りがしてあるか、全体が金色に彩色した皿なのであろう。店によっても違いがあるようだが、一般的な思考によれば、金の皿にのっている鮨は、単価の高いものだと思う。旬の寒鰤を握った鮨の美味さが、たとえ回転寿司であっても伝わってくる。地場の海で獲れた寒鰤を捌く地方都市の店のものなら尚更旨かろう。

山眠る未知なる力蓄へつ　　越田栄子

暖かな冬陽に包まっている人里の山を擬人化した俳句と解すると、一段と親しみが濃くなってくる。外的な力が働いても反応せず、冬眠する動物のようにひたすら眠り続ける山なのである。そして、吹き渡る風や木々の葉に降り注ぐ雨に春の兆しが現れると、少しずつ眠りから覚め山が動き始める。冬山には、人間や生き物に幸せをもたらす力が詰まっている。

白壁の家並琥珀に日脚伸ぶ　　山岸久美子

白壁の家並は、田畑の向こうに見える旧家の土蔵であろうか。それとも、蔵の町として観光名所になっている栃木市の巴波川（うずまがわ）両岸に遺されている江戸時代の豪商の土蔵であろうか。冬麗の陽射しを浴びて輝いていた白堊の壁の色が、陽が西に傾くにつれて琥珀色に変化してゆくという表現が素晴らしい。数日前と比べて琥珀色に変わり始めるのが遅くなったことを敏感に感じ取り、季語によって的確に表現している。

我先と女系家族の初鏡　　梅澤輝翠

広辞苑によれば、「女系家族」には二つの意味がある。その一は、代々娘が婿をとって相続してゆく家族。その二は、一家に女性の人数が多く、女の権限や力が強い家族。掲句のそれは、現代の社会環境から考えて後者その二を指すものと思うが、実際には、前者その一の方が内容が濃く余韻のある俳句になると思う。しかし、そうなると上五の言葉が句を陳腐化してしまうので替える必要がある。何れにせよ、古より女性にとって鏡がいかに大切なものであるかを示している。

風花に青春の日々巻き戻す　　西幅公子

山を越えて飛来する風花には生れ在所がある。つい「何処から来たの」と訊いてみたくなる。子供の頃故郷の野で風花と遊んだことや、恋を知り初めた中学生の頃に、詩を書き留めていたノートに風花が舞い落ちたことなど、いま風花に遭

遇した作者を一気に若返えらせたのである。

初雪や陶の狸が薄化粧　　笹本啓子

信楽焼や益子焼など、焼物の産地で作られた陶狸で、大きいものは大人の背丈よりもはるかに大きく、一方小さなものは掌に収まるようなものまで様々である。

この狸は、窯元か或いは観光物産店の屋外に保管されている人体並のものであろう。年の瀬に降り出した初雪が、狸の身体を、提げている徳利［人徳］や通い帳［信用］、そして大きな金玉［金運］にも薄らと積もっている。滑稽味のある陶狸に対する「薄化粧」が妙味を醸している。

リモコンを探す左手寝正月　　檜鼻ことは

「寝正月」の意味の一つに、風邪や病気のために床について正月を過ごすとあるが、本句に関しては、年末の疲れから身を解放するために、外出せず家でごろごろしている、という明るい意味に解釈してよいと思う。利き手が右だとすれば、右手に煎餅を持ち、空いている左手でテレビ又はエアコンのリモコンを探しているという構図が見えてくる。作者の生の姿を曝け出していてなかなか味わいのある俳句である。

駅伝鼓舞し鳶二日の大空を　　丸屋詠子

新年の三が日には、幾つかの駅伝競技が開催され、二日は、一九二〇年から続いている「箱根駅伝」（正式名＝東京箱根間往復大学駅伝競走）の平塚中継所辺りの上空をゆっくり大きく旋回する鳶。今年総合優勝に輝いた青山学院大学や他の上位校はともかく、シード権を争っている大学や下位チームの選手の状態を観察していると、レースの厳しさがひしひしと伝わってくる。こうした成績の奮わぬチームのために、高空から鳶が声援を贈っているような気がする。

劇場を出れば現よ月冴ゆる　　橋本京子

作者の観たのはどのような芝居であったのか。身も心も蕩けるような恋愛ものか、心が充足する文芸作品か、それともシリアスな事件を題材にしたスリラー調のものか。何れにせよ観客の心を強く捉えた劇であったのだろう。劇場を出れば中天に冴え冴えとした月があり、現実に戻る一瞬であった。

キャッチボール転がる先の初景色　　元田亮一

自宅の前の道路で息子さんと興じているキャッチボールであろうか。毎日見慣れている景色の筈なのに、捕球しそこなったボールを追って行くうちに、未知の景色を見ているような気分になった。ちょっとした意識のずれによって、このようなことが起こることを筆者も経験している。季語「初景色」

を、敢えて本意と異なる視点で捉え鑑賞してみた。

甘え子の一礼凛と寒稽古　　新　暦文

幼稚園か低学年小学生男児の柔道か剣道道場の寒稽古を想像した。道場をそっと覗いてみると、家庭では甘ったれている子が、今日は背筋を伸ばしてきりっと立ち、正面の相手を見て礼儀正しく礼をした。まさに驚きと感動の一瞬である。

大革の一打ちカンと冴え渡る　　原田秀子

大革は大鼓のことで、右肩にのせて右手で打つ小鼓に対し、左の膝に横たえて右手で打つのが大鼓である。能や長唄には欠かせない楽器であるから、耳にする機会が多いと思う。

湿度の少ない冬、奏者の一打ちが乾いた空気を貫いて観客の耳に届く。心の高鳴りを誘う一打である。

下町の屋根に十字架除夜の月　　曲淵徹雄

下町の意味が一般概念に基づくものか、或いは、東京都の二十三区を対象としたものか迷うところではあるが、人口が密になっている町の中にあるキリスト教の教会という解釈でよいのであろう。屋根に十字架があるとしか書かれていないので、その建物は教会の体を成していないのかも知れない。この俳句の中に、「こんな場所に教会が？」といった作者の素朴な疑問が包含されているように思えてくる。除夜に縁の深い寺社ではなく、十字架と月の取合せに妙味がある。

破線どほりに切れぬ鋏や雪催　　保坂翔太

水明集や季音の投句用紙でお馴染みの「破線」である。筆者の立場として、破線通りにきちんと綺麗に切らずに、幼児がするような乱雑な切り方をした用紙を用いて投句してくる会員がいることに憤慨している。

掲句の場合は、作者の人柄から考えても乱雑に切ることは考えられないので、たまたま癖のある鋏を使った結果だと思う。破線に沿って真っ直ぐ切っているつもりなのに曲がってしまう事への心の苛立ちが、「雪催」という陰鬱な季語によって伝わってくる。

軒つらら窓辺に無垢の光降る　　神田治江

軒にできた氷柱は天からの授かりものであり、溶けた雫が汚れのない光を発して窓辺を彩る。

天を切る笛の音高し寒稽古　　新井孝麿

能か歌舞伎の囃子方の寒稽古であろうか。その内の笛方の吹く篠笛か能管の音だと思うが、句の内容から判断して能管かと思う。「天を切る」が強い高音を見事に表している。

水琴窟

（水明集二月号鑑賞）

池田雅夫

黒塀の黒濃くなりぬ袖時雨　小林京子

どこぞのお屋敷であろうか。情緒のある黒塀が時雨に濡れていっそう黒くなってみえる。そこに深い趣を感じているのだ。「袖時雨」は袖に涙が落ちかかる様を「しぐれ」にたとえたもので、本来の「時雨」でないことを承知しておきたい。

坪庭に残りの月を独り占め　嶋田洋子

「残りの月」は夜明けの空にまだ残っている月をいう。月齢でいうと二十三夜以後で下弦の月より細くなる。「独り占め」とあるので、まだそれほど欠けている月とは思えない。この月はおそらく「後の月」と解釈するのが妥当であろう。

杭打の重機響動もす芒原　森美枝子

芒は繁殖力の強い植物で、草地、土手、道ばたなど、いたるところに分布する。原野の芒原の造成地だろうか。測量が済み、杭打ちが始まった。高層ビルなどは深く杭を打ち、基礎を固める。「重機響動もす」に現代社会が描かれている。

初時雨公衆電話に人の影　岡田宣子

その冬に初めて降る時雨を「初時雨」という。いよいよ冬が来たかという感じとともに懐しさがただよう。いきなりの時雨に公衆電話ボックスに駆けこみ急場をしのいだのだ。

秋寒や息にくもりし老眼鏡　水野興二

秋も深まり、山川草木静けさの中にあり、朝晩には寒ささえ感じられる。掛けた「老眼鏡」が息でくもってしまった。えてして鼻めがねになりがちで、吐く息に近いためにくもったのだろう。マスク着用の昨今の情勢に結びつく。

模様替へ部屋の奥まで小春の陽　鳴海順子

十一月ごろになると気候も穏やかになり、ぽっかりとした好い日が続く。「小春」、「小春日」などといわれている。小春日に部屋の「模様替へ」を決行した。家具で遮られていた日射しが部屋の奥まで届き、悦んでいる様に共感する。

街灯のひとつ瞬く初時雨　綿貫ひさの

「街灯のひとつ瞬く」を評価したい。これが「一勢に」であるならば、街全体が雨で暗くなってしまう。「初時雨」であるから、強く降るところ、小雨のところなど「むら」があって不思議でない。その特性を巧みにとらえている。

海風を受けみかん山輝けり　山下ユリ子

みかんの産地の多くは海に面する傾斜面で日当たりもよい。日中の日射しを万遍なく受け、海の風に揺らぎ、その甘さをたくわえていく。「みかん山輝けり」に豊かさが表われる。冬の代表的な果物に平和を感じるほどである。

託けて簡略にせし冬支度　細井良子

「託（かこつ）けて」が言い訳じみていて滑稽である。ごく小さなことでもその気があれば、まちがいなく「冬支度」なのだ。しかし、いざ始めると、あれもこれもと大袈裟になることもしばしば。謙虚な心構えが幸福の礎になるだろう。

太陽の匂ひ籠りし干ふとん　田中泰子

近ごろ、高層マンションでは窓やベランダで蒲団を干すことが禁じられているところが多い。強風で飛ばされる恐れがあることも一因とされる。しかしながら、干されてふっくらした蒲団の感触は格別である。「太陽の匂ひ」に共感する。

日記には善き事のみを寒昴　横山礼子

冬の星は青白く冴え冴えとして鮮やかに見え、ただひたすらに輝くばかりである。一日を終え、「日記には善き事のみを」記す。これも楽しく生きる術なのであろう。

凩や沙翁悲劇に寄る心　岡田芳春

「沙翁」はシェークスピアのこと。「ハムレット」、「マクベス」、「オセロ」などの悲劇が有名である。「凩」は、「木嵐」の転訛といわれる。木の葉を吹き落とし枯木にしてしまう様が沙翁の悲劇に通づるものを感じている。

一番乗りの初登院や竜の玉　髙橋満耶子

竜の髭は常に緑に茂っていて庭石に配されることも多い。厳寒のころ瑠璃色の小さな実をつける。厳しい選挙戦を勝ち抜いて当選しての初登院。「一番乗り」にその誇りと責任感が表われている。逸やる気持ちが「竜の玉」の弾みに重なる。

ま白き道雁木うれしや越後の夜　川島夕峰

「雁木」は越後、とくに上越地方が有名で、雪で閉ざされる道に沿い、軒の屋根をつなげて、その下を通れるようにしたもの。「ま白き道」とした工夫に感心した。雪は夜でも仄白く見える。「うれしや」の表現に工夫をすすめる。

あたたかや箒に伝ふ砂利の息　吉川拓真

道を掃いているのだろう。春の日射しを受けて砂利がまるで息をしているかのように膨らんで見えた。中七の「伝ふ」は他動詞では終止形。自動詞とするならば「箒を」が適切。

句集喝采

近藤徹平

◆佐藤文子「火炎樹」

東京四季出版

著者略歴　昭和二十年三重県生。同四十二年「天籟通信」入会、穴井太に師事。同六十年信濃俳句通信創刊、主宰。句集『邂逅』『火の一語』既刊。甲信地区現代俳句協会会長。現住所松本市。

著者はあとがきに、二十五年振りの句集で、自然風景にとどまらず心の風景にも挑戦し、事実とも非事実とも知れぬものを描きたかったと記す。季節別の編集のため、著者の二十五年間にあった筈の心境の変遷を推し量れないのが残念。

火炎樹や愛されぬまま髪を梳く
ふるさとは捨てるものなり春怒涛
生国を封印したる曼珠沙華
奪ひたる恋も捨てごろ雪解川
良き妻を演じし後の昼寝かな
夫の恋大したことなし秋刀魚焼く
天を割り山砕きたる男滝

第一句は標題句で、著者がカンボジアからベトナムへ旅行した際に出会った大樹でその佇まいに心を惹かれたとのこと、「愛されぬまま」は唐突だが独り旅の感傷の吐露なのか。第二句、第三句は故郷を詠んだ句だが、戦後の人口流動の激しい社会が故郷への帰属意識を希薄にした事例は多い。第四、第五、第六句は恋愛・夫婦愛の句だが女の逞しさが隠し味。第七句は豪快な自然風景の句。次の新たな魅力の句に期待。

◆岩本功志（たかし）「一陣の風」

壱岐坂書房

著者略歴　昭和十八年鳥取県倉吉市生。平成二十四年野火我孫子句会入会、菅野孝夫に師事。俳人協会会員。現住所千葉県柏市。

菅野孝夫主宰は跋に「著者は世界を舞台に活躍したビジネスマンだが、普段はモーレツ社員の面影を見せない」と記す。

一陣の風に棚田の鳥威
ふるさとの団子の味や桜散る
稲妻や故郷行の寝台車
大寒の海が鳴るなり石廊崎
阿寒湖の人のまばらに秋気澄む
グラナダの洞窟劇場年暮るる
レマン湖に浮かぶ古城や雪の嶺
ソレントへ帰るヨットや日の名残
レガッタやテムズに競ふ櫂の音

著者はあとがきに町の図書館で俳句教室の募集ポスターを見て入門したと記す。第一句は標題句だが、今も懐かしい故郷の原風景。第二句、世界を股に掛けたビジネスマンにも懐かしい故郷の味。第三句、育ての親の叔父に会いに行く。第四句・第五句、景勝地の繁閑に拘らず精力的に訪れて吟行に努めている句。第六句より第九句まで、駐在した国三ヵ国、訪れた国四十ヵ国の著者が、季語を絶妙に活かしスペイン・スイス・イタリア・イギリスを詠んだ句。次の句集に期待。

俳句

5月号予告

4月25日発売

予価1,040円（本体945円）⑩

特別作品 小川軽舟・中村和弘・藤本美和子

特別座談会

季語の冒険者たち

宮坂静生／井上弘美／山田佳乃／堀切克洋／神野紗希（司会）

特集

取り合わせの距離感 即かず離れずのコツ

▼総論エッセイ……坪内稔典

▼実作指南 絶妙な距離感のコツ ほか

人物特集

没後50年 三橋鷹女

▼総論 三橋鷹女とその偉業

▼論考 鷹女作品の特徴と現代的魅力

一九四〇年代の三橋鷹女

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖 夏

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2022年5月号

特集 **俳人と仕事**

○総論～俳人とバックグラウンド 青木亮人

○私の仕事 岡崎桜雲 酒井湧水 稲田眸子 細谷喨々 五島エミ 木暮陶句郎 高橋健文 矢作十志夫 川嶋ぱんだ

○俳人という仕事 才野 洋 龍野 龍

特別作品21句 西村和子

〈グラビア〉俳句界NOW 依田善朗

特集 **美ら島・沖縄 ～沖縄の俳句**

○論考～沖縄俳壇の歴史 野ざらし延男

○沖縄を詠んだ名句 鈴木光影

○沖縄の季語から見える風土の魅力 上地安智

○沖縄を詠む 岸本マチ子 三浦加代子 前田貴美子 安里琉太

追悼・稲畑汀子「ホトトギス」名誉主宰

※セレクション結社 「山茶花」三村純也

私の一冊 山本一葉「俤」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！ 川柳つくし（落語家）

「俳句界」投稿欄 一流選者15名！ 日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森 お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

網野月を　選

山紫集

初春や笑まふ城子に二百号　宇田白鷺

初春や妻は電話に加賀訛　近藤徹平

初春やためす稲荷の力石　橋本京子

初春や一刀彫の虎吠えろ　湯浅　和

じやれ合ひて家族写真や千代の春　大塚茂子

ヴェルディを聴く初春の赤ワイン　梅澤佐江

備忘のメモ大小あちこち老の春　丸山マスミ

初春や干支の土鈴のりんと鳴る　樋口元美

撮り鉄乗り鉄初春の一人旅　町野広子

山手線何処で降りても今朝の春　瀬戸雄二郎

初春や金粉うるさき酒を飲む　石田慶子

——以上特選

恙なく迎へし初春の酒旨し　仲田利子

初春や土手の草花生々し　南條きわゑ

初春や眼きらきら豆剣士　西浦千枝子

初春の陽に滑降の八甲田　西幅公子

初春や花器より溢る大王松　野口和子

若冲の鶏の一声明の春　野田静香

初春や老母となりて宮参り　野平美紗子

初春の流人の墓にストレチア　野村美子

湯浴みするカピバラとろり四方の春　原田秀子

初春や船出を祝ふ水明り　日髙道を

初春や一本の花買ふ少女　福田千春

ありがたき米寿超えたる今日の春　藤澤喜久

初春の六度目の日よ寅吠ゆる　古池恵里子

初春や保育器出でし初子抱く　保坂翔太

初春や亀甲著き松の幹　曲淵徹雄

雅なる指のマネキン四方の春　正木萬蝶

金粉の酒を朱盃に老いの春　松井由紀子

初春や晴着と緑の黒髪と　宮崎紫水

初春や菌の死滅をひたすらに　宮﨑チアキ

初春や長唄聞ゆ昼下り　村杉清吉

初春や太く伸びやか吾子の筆　本橋稀香

初春の厨の水のやはらかき　森　和子

御代の春日の丸立てる祖父の家　森川義子

初春や出会ひ実りてすぐそばに　森下美智枝

誇らかな鳩の群舞や明けの春　森本早苗

初春や幼きたより枕辺に　山岸弘子

初春や家族息災犬元気　山中いちい

初春や虎の置物動き出す　山田美佐尾

屏風絵の虎の眼ぎらり今朝の春　横山君夫

初春や見るものすべて輝けり　横山礼子

先づ一句誌す日記や老の春　青木鶴城

迎春や小江戸明け六つ時の鐘　新　暦文

これはあの日光颪(おろし)けさの春　阿部幸代

年寄れば参社かかせぬ千代の春　安倍弘夫

初春のなるとののの字ふふふふふ　新井孝麿

吉とせり初春のもの忘れ　荒井倶子

初春の空を切り裂く禽の声　飯田忠男

早春賦野にあふれだす反射光　池田雅夫

をさな子も三つ指ついて明の春　石川理恵

初春や陰り見えしもおだやかに　井関礼子

初春や試歩の杖ゆく野の光　井上燈女

初春や指呼に立つ富士母性めく　井上玲子

初春や仔犬と登る老いの坂　井口俊晴

瑞鳥に見ゆる鴉や今朝の春　上戸千津子

産土に会ひに行きましよ老の春　梅澤輝翠

初春や金の蒔絵の尉と姥　大場順子

踊りさうにワルツ指揮する明の春　岡田宣子

初春やじやんけんで決むサーブ順　葛城千世子

初春の土間に掛くるや鬼の面　加藤でん治

初春や一〇〇回まではもう少し　川村　治

石仏の吾子に耀りの今朝の春　神田治江

初春や主殿の絵馬の白い虎　木村るみ子

迎春や更に威厳を園の虎　熊倉千重子

人に逢ひ人を愛して初春よ　河野はるみ

初春やつがひの朱鷺は飛び立てり　小駒さち子

初春の手水を割りぬ峡の寺　越田栄子

掛け軸の富士玲瓏と今朝の春　後藤綾子

四方の春邪気払ふよな大嚏　小山敦子

初春や金粉浮かぶ酒供へ　斎藤みよ

補ひつ労りあひつ老の春　榊原聰子

明の春はなびら餅の紅美しき　佐々木典子

初春や幡のはためく愛宕山　笹本啓子

初春や傘寿祝ひて大吟醸　佐藤克之

冷凍の蟹に鋏を今朝の春　渋谷きいち

巌松の神さびて立つ浦の春　下川光子

初春や余生一つが差し引かる　菅原卓郎

嫁が淹るるカフェ香しや今朝の春　菅原真理

希望少少配合春の初めの陽　杉浦理恵

明の春終りの見えぬ独り酒　鈴木藻好

迸る春のプリズム花手水　諏訪サヨ子

改めて妹の意気に謝す初春　関谷多美子

今日からは免許返上老の春　染谷正信

初春や殻を破らむ喜寿の年　反町　修

初春や木鶏時を告げたがる　高島寛治

床柱に背丈の印おらが春　髙橋満耶子

初春や老女を囲む顔の数　武田重子

猿廻し失敗させて初笑ひ　田中章嘉

初春や干支の土鈴と水薬　　鳥羽和風

張り詰めた厨に立ちぬ今朝の春　　飛永　鼓

初春や墨の香りの半紙並ぶ　　外村紀子

鷹の目の鷹匠と先同じうす　　仲田利子

鷹止まる池に傾く骨一樹　　橋本京子

暗がりに鷹の鉤爪蔵の冷え　　山岸弘子

山紫集作品評

網野月を

大多数の御投句が新年の季語「初春（はつはる）」で解していたようである。数句は春の季語「初春（しょしゅん）」とも解せるものがあった。他にも同じ表記で季を跨いだり、異にするものがあり、例えば「氷雨」「雪虫」「草石蚕」などである。

初春や笑まふ城子に二百号　　宇田白鷺

福井県若狭町に「鳥羽谷」という句誌がある。「水明」の僚誌と言って良いだろう。そしてその表紙画は、今でも長谷川かな女師が描かれたものを大切に踏襲されている。その「鳥羽谷」が本年一月で記念すべき二百号を発刊して、五十年の歴史を刻んだのである。「城子」師は、「鳥羽谷」の初代主宰であって、筆者は、生前にご好誼を賜った次第である。また作者の白鷺氏は二代目主宰であり、俳句における筆者の兄貴分である。「初春」「笑まふ」「二百号」と言祝ぐ措辞を並べての統一感がこれからの「鳥羽谷」を祝っているようでもある。弥栄を祈念してやまない。

初春や妻は電話に加賀訛　　近藤徹平

御奥様は石川の御出身なのであろうか。産の国の方と話すと国の言葉に戻るのである。初電話ならではの景であり、聴である。上五の季語「初春や」に拠って、座五の「加賀訛」に対しての作者の心持が表現されている。つまり、微笑ましく、嬉しく、且つ有難く感じ入っているのである。円満なお正月を迎えられている。

初春やためす稲荷の力石　　橋本京子

句の主題は、文字通り座五の「力石」である。「ためす」のは作者本人なのか、それとも同行の家族か親戚かであろうと想像した。持ち上げるだけの年配者がいたり、頭上に高高とかざす若者がいたりする。「力石」の試しは、七五三祝いであったり、願掛けの成就の御礼参りの際と様々であろうが、今回は「初春」なのである。無病息災祈願とともに、自己の

体力の確認も含まれているだろう。上五の「……や」切れが、活きている。毎年恒例の家族の行事なのかも知れない。

初春や一刀彫の虎吠えろ　湯浅　和

一刀彫の虎と言えば、奈良一刀彫の十二支飾りなどが有名であるが、奈良一刀彫のそれは目が真ん丸で何とも愛くるしい。ユーモラスな感さえ漂わせている。その場合は、「吠えてごらん」というところであろうか。一方で勇猛な態の一刀彫もある。今にも吠えそうな気迫に満ちていて、「吠えろ」とは、彫物の気迫に負けてそう言わざるを得なかった作者の感慨が窺われる。上五の「……や」切れに座五の命令形は難しい技法だが、巧みにまとめ上げている。

じゃれ合ひて家族写真や千代の春　大塚茂子

ご家族恒例の家族写真の撮影の景である。初春の傍題、もしくは子季語としての「千代の春」のバリエーションが誂えた様にぴったりと嵌まっている。中七の「……や」切れも潔い作法で好感大である。

ヴェルディを聴く初春の赤ワイン　梅澤佐江

とりあえずは『椿姫』の「乾杯の歌」でしょうか。本来はシャンパーニュでもあろうかと考えるが、『椿姫』の原題はLA TRAVIATA（道を踏み外した女）であるから、「赤ワイン」が最も似合うのである。中七の「……聴く」の後で半分くらいの切れがあってリズムの間がある。披講者の腕が試される句である。

備忘のメモ大小あちこち老の春　丸山マスミ

座五の季語「老の春」の斡旋が季語の意味合いを拡げているようである。旧来は、数え年で新年に一歳加えるので長寿を祝う「老の春」なのであろうが、本句は上五に「備忘」とあるので、「老」の現代的な解釈が加味されていて、嘗て誰かが言っていた「老人力」のような意味合いが付加されている。季語の本意を拡げてゆくことが現代の俳句作家の役割なのである。

初春や干支の土鈴のりんと鳴る　樋口元美

かならずしも「土鈴」が「りん」と鳴るのかどうかは分明ではないのだが、上五の季語「初春」に導き出されて「りん」と鳴ったように聞こえたのである。「初春」と「りん」が句の骨格を真直ぐに形作っている。

撮り鉄乗り鉄初春の一人旅　町野広子

いわゆる鉄っちゃんの生態を描いているのだが、はた目から見ている鉄っちゃんは一様に群れているようで、実は個人主義なのかも知れない。自立した男の子の姿が「初春の一人旅」に活写されている。

山手線何処で降りても今朝の春　瀬戸雄二郎

ザ・ハイクの感が横溢している。事実を叙景しながら諧謔味たっぷりとも、祝春とも解釈できる句である。作者の俳句的慧眼が其処にある。

大村節代　選

鼓笛集

雛飾る遠き日のこと語りつつ
色褪すも家族の歴史古雛
のちの世も平和であれや雛納め

越田栄子

久に会ふ春装の友美しく
かろやかに春服ゆらし駅ピアノ
マネキンの小顔に映えし春の服

原田秀子

レコードにそと下ろす針春の雪
ひとり行く一本道の朧かな
昏鐘を蛙も聞くか谷戸の寺

曲淵徹雄

橅の木の「根開き」不思議草萌ゆる
尻皮で滑る残雪野天の湯
山の吊橋途中で気付く朧月

渋谷きいち

吉日の茶事の仕度や梅日和
朝ぼらけ京北山に残る雪
リメイクは母の羽織よ春の服

野村美子

山すその白き妖精節分草
畑一色の紫なるや仏の座
バスの中の秩父訛や梅の里

森下美智枝

相方を待つ片割れの手套かな
掌に受けて容かへたる春の雪
切株の朽ちたる真中草萌ゆる

斎藤みよ

春の陽と共に悠々観光船
薔薇の芽を川風そつと震はせて
春雷や足よどませて駅広場

加藤でん治

筋トレや寒九の水の一気飲み
江戸紫の着物引き出す女正月
ほつこりと一服の茶や春の雪

綿貫ひさの

啓蟄や未だ目にせぬ虫の影
春寒し筑波嶺空にくつきりと
平城山の今に床しき初桜

仲田利子

競ひ合ふ緋桃白桃青き空
白酒や女系家族の厄払ひ
春菊や小犬厨に御座りす

反町　修

白梅や咲きて産土井戸の側
女坂隅に小さき草青む
眺むれば蕾はかたし花大根

新井孝麿

ふらここの音伸びやかに二男生る
古雛と真つ赤な襦袢飾りけり
早や余生夫と夕餉の菜の花鮓

関谷多美子

春一番出し物替へる旅一座
萵苣(ちしゃ)剥ぎて惰眠の主を起こしをり
取り澄ます春一番がやつと吹く

菅原卓郎

姿見に女三代花衣
和箪笥に祖母の句在りし春落葉
花曇形見の指輪疵深し

横山礼子

角川俳句コレクション
第4弾
草田男深耕
渡辺香根夫 編　横澤放川
葡萄食ふ一語一語の如くにて　草田男
中村草田男、その魂の二十年を深耕する一冊。フランス思想にも造詣が深い著者が、深みの次元に照明をあてた画期的な草田男論。草田男句の鑑賞と著者の講演・評論で構成。
好評発売中

定価1,980円(10%税込)
四六判／並製／188頁
ISBN978-4-04-884429-1
KADOKAWA
発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
●〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 ●TEL.KADOKAWA購入窓口 0570-002-008

鼓笛集作品評

大村節代

色褪すも家族の歴史古雛　越田栄子

近頃は、子供が成長して飾らなくなった雛を、何体も集めて飾る市町村や施設等があります。それはそれで大切な雛の行末として素晴しい事だと思います。しかしお雛様を親から子、孫へと代々受け継ぎ、家族の歴史を語り継ぎ、先祖に思いを馳せるのは素敵な事だと思います。色褪せたお雛様は家族の幸せな歴史そのものです。これからも代々の歴史を、お雛様と紡いで行かれますように。

かろやかに春服ゆらし駅ピアノ　原田秀子

誰でも自由に弾けるピアノが、あちこちの駅に置かれて、楽しんで弾く方々を見受けます。

人指し指一本でポツンポツンと「蝶々」や「はとぽっぽ」等と弾いて、そっと歌っている男女。やっと両手で弾く児。そして、春服の女性が、かろやかにショパンを弾くと、通りがかりの人も足を止めてピアノを囲む、楽しい春の一時です。

鼓笛集巻頭（三月号）

私の好きな一句（自句自解）　檜鼻ことは

冬めくや骨董市の欠け茶碗

二十五日は天神さん。北野天神の境内に市が立つ。年代物の陶器などが無造作に積まれ、冷やかし半分に覗くのがまた楽しい。

ふと目に留まった欠茶碗、どうも気になって心がざわつく。案外、掘り出し物かもしれない。いざ交渉にはいると、これがまたいいお値段なのです。

レコードにそと下ろす針春の雪　曲淵徹雄

雑音のないCDにアナログのレコードが、ほぼ駆逐されたのは昭和六十年代。その雑音のないクリアな音に人々は熱中しました。しかし近頃は、時にノイズの入るアナログのレコード盤に、人間味を感じる人が増えてきたと言われています。そと下ろす針の表現に、大切なレコードを大切に扱う様が伝わります。

水明通信

「黒木ルイズ」さんのこと

元田亮一

十数年前、熊本で働いていた頃の話である。出先の営業所の一つが阿蘇にあった。初めて訪問する日、名簿を眺めていると、そのうちの一人の名前が気になった。黒木ルイズという名前である。あまり見かけることのない名前である。ハーフの方であろうか、海外からのお嫁さんであろうか。少々の興味がわいた。

営業所に集まった方々の中にそれらしき人はいなかった。責任者に尋ねると、部屋の片隅に静かに座る年配の女性がその人だという。当時、すでに七十歳を過ぎていた。どことなく寂しげな印象の女性であった。

その後は月に一回程度営業所を訪問し、会話を繰り返すうちに心を開いてくれたのであろうか、彼女の唯一といってもよい趣味が俳句であることを教えてくれた。私も俳句の鑑賞は好きであり、一日の仕事が終わると、俳句の話に興じたりもした。彼女の作る俳句は、大自然に囲まれた農村での日々の暮しの中の小さな感動や喜び、野趣豊かな風景等を丁寧に描写していた。時折、彼女から自作の俳句が届くようになり、私も不器用な俳句を作り返句したりもしていた。熊本での勤務がやがて三年を経過し、私の転勤が決まった際には、俳句をしたためた色紙を数枚餞別にいただいた。

転勤後、しばらくの間はメールでのやり取りをしていたが、ある時を境にメールが通じなくなった。何が起こったのであろうか。かなりの高齢であり、身寄りも無いようなことを聞いており気にはなったが、多忙にまぎれそのうちに彼女のことを思い出すこともなくなった。既に退社しており、かつての同僚もその後のことは承知しておらず、彼女の行方は杳としてわからなくなった。名前の由来は、ついぞ聞くことはなかった。

先日、会社の書棚を眺めていると一冊の本が目についた。背表紙には「涓々抄」とある。ページを繰ると、親会社の役員の趣味が高じ出版した私家版の句集であった。奥付を見ると平成十七年に発行されており、かつて社内の誰かが贈呈され、書棚に置いたようだ。役員は、西片征風主宰の「朝風」に所属しており、そこでの一句鑑賞も任されていたようだ。掲載されている鑑賞句の作者を見ると往時の社員の名前もちらほらあった。何気なく読み進めていくとそのうちの一句に目が留まった。

籾種を浸せし川に花吹雪　　黒木ルイズ

俳句の縁が、この再会を導いてくれたものと考えている。

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木和子　報

唐破風の異彩を放つ浅き春　節代
春寒しボトルシップの薄埃　由紀子
浅春の瀬音未だし旅鞄　マスミ
魚板打つ木槌の音や春寒し　光弥
春寒のガード少女と擦れ違ふ　和葉
鳥引くや坂の半ばの異人墓地　延昭
春寒し扉細目にとあるバー　治子

――以上特選

春寒しくちびる紅き地蔵尊　延昭
春寒や左側通行止むなし　和葉
寒紅梅の異彩を愛づる北の窓　チアキ
春寒や向かひのホーム陽燦燦　理恵
異次元にさ迷ふ心地石鹸玉　治子
念仏をはく空也の痩軀春寒し　順子
手相見の異なる見立て風信子　喜恵
異国語の飛び交ふ秘湯春寒し　徹平
春寒し剽げ声張る「太郎冠者」　由紀子
観客の疎らに坐り春寒し　稀香
春寒し見惚る裏富士見え隠れ　節代
観梅や異郷訛を背に聞く　マスミ
春寒や猫の行く道問うてみよ　はるみ
春寒し脱げぬ藁衣の路傍仏　光弥
春寒し衰へ知らぬ異変株　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映　報

春泥のなき町に住み子はどろんこ　竺仙
春泥や学習雑誌発売日　〃
音の無き第一学食春浅し　いちい
草を食む牛の額に春の泥　〃
絵のやうな早春の海と灯台　敏江
予報2℃雪の別れや食ひぞなへ　士史
食事会日延の知らせ春夕　サカエ
春泥や弥勒菩薩の肌の笑み　峰雄
鈴鳴りの絵馬に吹く風枝垂梅　鶴城
春の泥上目遣ひの反抗期　いちい
春日和じやれ合ひ食らふ猫パンチ　敏江
蕗の薹お前に逢ひに戻ろうか　竺仙
こつこつとヒール響かせ春立つ日　玲子
春の泥かはしつ走る祀り道　士史
春泥や茶会の朝の足袋白し　サカエ
プレー中春泥に入るボールかな　美代
朝市や採れ立て野菜に春の泥　みどり
放たれてはしやぐ仔犬や春の泥　絹映

――以上特選

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄　報

ビル風のつるむ十字路冴返る　徹雄
石塔を離れぬ鴉春寒し　〃
冴返る碧天を刺す避雷針　〃

好きだとかきらいだとかの霞食ふ　綾子
冴返る透けゆく今朝の磨硝子　萬蝶
片栗の花や天使に正と悪　〃
調律の音が迷子に春疾風　理恵
魚鼓を打つ僧の二の腕冴返る　昇

――以上特選

龍の目の「八方睨み」冴返る　大場順子
冴返るリアウィンドーの乱反射　萬蝶
駅の階段手すり伝ひに凍返る　理恵
春風や一気に渡る太鼓橋　徹雄
冴返る目出し帽子の鋭き眼　雅夫
寒戻り花に埋もるという夢　綾子
この松に生を託して冴返る　岡野順子
冴返る星の消えたる午前四時　康世
埴輪の目焦点なくて冴返る　喜久
首を恋ふ胴塚今に冴返る　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

凍蝶に触るれば指の痺れさう　延昭
節分の鬼をねぎらふ般若湯　〃
節分の鬼の逃げ込む縄のれん　昇
凍蝶と日差し分け合ふ縁框　〃
節分や木戸に名残りの豆ふたつ　暦文
煩悩の消えぬ八十路や節変り　〃
節分や身ぬちの邪気を打ち払ふ　玲子
舞ひ心ふつふつ沸き来節変り　光弥

――以上特選

凍蝶の夢む「真珠の首飾り」　光弥
悪役の鬼のヒーロー節分会　マスミ
力溜め明日へ羽ばたけ冬の蝶　翔太
落魄の小野小町や蝶凍つる　恵子
巫女舞の榊うるはし節分会　順子
節分や土間に掛けたる鬼の面　でん治
風葬かくや凍蝶を置く無縁塚　昇
永劫を動かぬ構へ凍てし蝶　寛治
補陀落を夢みて凍蝶羽たたむ　玲子
節分や路地を抜けくる子らの声　由紀子
凍蝶の微かに岩の透き間より　光子
日溜りへダッチロールの冬の蝶　修
凍蝶や持つ手に重き草箒　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

末黒野の熱覚めきらずはや暮色　義子
蕗味噌や地味な昭和の話など　〃
一献を添へて蕗味噌亡き夫へ　紀子
残照の末黒野に置くしづごころ　玲子
焼野見る黒き瞳の農夫婦　はるみ
野を焼きて禊をしたるこころとも　水尾
末黒野を流るる水の輝けり　佐江
蕗味噌や人生てふはほろ苦し　〃
焼野原見るに見られぬ過去を持つ　理恵

――以上特選

蕗味噌の好きな二人へ供ふるや　はるみ
末黒野の夕暮れ寂と鳥の群　玲子
蕗味噌の味を愛でたる独り酒　義子
蕗味噌の苦さ戦後を思ひ出す　水尾
ほろ苦き蕗味噌の味徳利酒　美佐尾
末黒野に息をひそめてゐる大地　紀子
蕗味噌のさみどり香る瀬戸小鉢　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

梳く髪の艶増すけはひ雨水かな　佐江
船乗り待つ女将とボトル寒き春　マスミ
晴れわたる雨水の空に鳶の声　俊晴
春立つや爪よく伸びる薬指　千春
人に恋つけて呼びたし春なれば　理恵

――以上特選

立て札は人の絵文字や芝萌ゆる　月を
窓に入る風に土の香雨水かな　千春
庭先から訪ぬる雨水の女所帯　ひろこ
おしろいの香染み入る街の雨水かな　慶子
急行に胸騒ぎ乗せ雨水の夜　理恵
春めくや人は仮寝に酔うてをり　鶴城
鎮もれる湯島聖堂今日雨水　マスミ
天地の渇き癒しぬけふ雨水　佐江

心持ち素肌に微温雨水かな　倭子
雪山よ光る嶺嶺天を衝く　紀子
節分や人それぞれに鬼の顔　俊晴
雨水かなカーテン無地に付け替ふる　はるみ
老医師の診察ゆるり雨水かな　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

春宵の高座を沸かす男振り　早苗
町騒の遥かなりけり花辛夷　礼子
辛夷咲くや光とらへて伎芸天　玲子
芽柳や足のもつるる美男車夫　道子
郷に向く首有りつ丈鳥帰る　ゆら女
引鳥を見し夜は言葉やさしゅうす　和子
辛夷咲くことも無さげに季移り　洋子
――以上特選
藁茸を一際浮かす花辛夷　千津子
しばらくは民家の絶えて梅林　千枝子
辛夷咲くセーラー服の二人連れ　千世子
吉宗の気高さ今も城の梅　満耶子
立春や料理競へば笑み増ゆる　きわゑ
故郷は遥かとなりし花辛夷　礼子
朗報や辛夷つんつん希望の芽　早苗
川光るときには高き野焼の火　玲子
味噌の香のゆげ馥郁と春立てり　ゆら女
一輪とは思へぬ香り梅開く　洋子
暁光や旅の目覚めの白辛夷　和子
椿東風重なりて鳴る舟の絵馬　道子

昔話あれこれ14

女鳥王の玉くしろ

さて、前回の話で、女鳥王と速総別王の悲恋の逃避行の末、打ち取られた話をしたが、その時追討軍の将大楯連は、女鳥王が手に巻いていた玉くしろ（腕飾り）を奪い取り、自分の妻に与えた。

その後、新嘗祭の酒宴の際、氏族の妻たちも宮廷に参内した。大楯連の妻も女鳥王の玉くしろを自分の手に巻いて誇らしげに参内した。

酒宴の席では仁徳天皇皇后の石之日売命が自ら、氏族の妻たちに大御酒を注いで回った。大楯連の妻の所まで来て、后は大楯連の妻が手に巻いている玉くしろが女鳥王の物と気付き、彼女には大御酒を与えず、直ちにその場から退出させた。

そして后は大楯連を呼出し

「お前は何という不敬をしでかしたのか。女鳥王と速総別王は天皇への反逆罪で処断された。しかし、お前は女鳥王が手に巻いていた玉くしろを、まだ肌も暖かい女鳥王の手から剥ぎ取って自分の妻に与えた。人道にも臣道にも悖る不敬で万死に値する。」と言って、死刑に処した。

これまでは、異常なまでに嫉妬深い女性として描かれて来た石之日売命が、ここでは理非曲直をわきまえた立派な皇后として描かれている。

有徳の帝・仁徳天皇の伴侶として相応しい「聖后」である必要があったのであろう。

＊昨年三月号から始めた「昔話あれこれ」の第一話は「枯野の琴」であったが、「枯野の琴」の話は、石之日売命の立派さを讃える「女鳥王の玉くしろ」の話の後に書かれている話である。

仁徳天皇は八十三歳で崩御

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

柿の木塾（浦和）

下萌や上り框にベビー靴　恵子
妻の留守持薬数ふる余寒の灯　昇
糶市のホースのたうつ余寒かな　かつ子
波音の夜をゆさぶる余寒かな　水尾
余寒なほ色とりどりの袋絵馬　和葉
ゆつくりとイエスタディを聴く余寒　節代
下萌ゆる犬と踏み入る河川敷　俊晴
日蔭なほ離さぬ強き余寒あり　光弥
をちこちと寸隙見つけては萌　和子

青葉の会（浦和）

春寒し繰り返しての風の音　森山洋子
白梅や追憶の母甦る　美紗子
春寒や群れ寄る鳥の湖光る　真理
「早春賦」小声で歌ひ春寒し　美智枝
春寒やナースは何時も急ぎ足　啓子
春の野に牛追ひ立つる牧舎かな　公子
春寒し途絶えしままの連絡網　和子
春寒し野菜の値にもアップダウン　洋子
春寒の暗き御堂に独り座す　輝翠
朝焼けの残雪の庭京の町　美子

神戸大池句会（神戸）

有言実行大寒のテープ切る　早苗
「立春の」句会となるも風雅かな　礼子
淡路島の花と見紛ふ風車　千津子
冴返る出石焼なる白き茶器　玲子

めだか句会（浦和）

影踏みの子に驚きぬ黄水仙　真由美
行間にまどろみ誘ふ春日かな　八千代
黄水仙衣紋を抜きて凛と立つ　英美
華奢な首風雪に耐ふ黄水仙　育子
新天地のカーテン透ける春日の香　智子
野の花も心も開く春日和　美智
春の日や黄の花の精ここかしこ　謙一
春の日やくの字の背中伸ばしをり　はるみ
欠点が長所となるや黄水仙　月を
酔眼の匂ひもおぼろ黄水仙　鶴城

りんどう俳句会（浦和）

春浅し荒川線の発車ベル　紀子
庭園の借景侘し浅き春　翔太
春浅き山に県警ヘリコプター　君夫
人の世は色即是空しやぼん玉　正信
春浅し益子の急須欠けしまま　サヨ子
しやぼん玉似かよふ節の童歌　治子
草の根の張りの弱さや春浅し　卓郎
しやぼん玉吹きてふくれて睨めつこ　弘夫
追ひかける子供は本気しやぼん玉　寛治
春浅し古都に訪ぬる薬師堂　徹雄
親の思ひ知らず子の吹くしやぼん玉　利子
しやぼん玉弾け青空ぬらしけり　順子

俳句の手ほどき（岩槻）

料峭や祇園の宿は片泊り　延昭
恵方より春一番の葉擦れかな　倭子
余寒なほ久しき人の片便り　佐江
モンローのポスターに声春一番　ます美
ゆく船に春一番は沖にあり　水尾
小町忌や片山の里の梅まつり　徹平
賑はひや片山の里の梅まつり　義子
曲がりたる間欠泉や春一番　翔太
春一番ておしぐるまの婆二人　忠男
片思ひ告げられぬまま卒業す　美子
春一番もののけ騒ぐ屋敷跡　幸代
野晒しの半鐘揺する春一番　卓郎
春めきて片手ではづす前ボタン　桂子
幸せが追ひかけてくる春一番　久美子
片皿に乗つ込み鯛の尾が立派　かつ子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

寒夕焼一人じや出来ぬ鬼ごつこ　延昭
公魚や赤城颪のなほ尖る　倶子
早春の空を切り裂くブーメラン　美枝子
葉牡丹やプリーツ深き服を買ふ　千恵子
イケメンが居ない里よと雪女郎　俊晴
積み肥を撒けば湯気立つ春隣　正信
釣り上げて公魚をどる手の平で　淑子
雪女哀しや窓に湯気滴　早都子
雄風に公魚を汲む帆引き船　昇

水明澪つくし句会（大阪）

雨上がり庭の草花土匂ふ　美令
蝋梅や記憶の中をかをらせて　智恵子
身の程知らぬ夢見し頃よしやぼん玉　洋子
丘の上の母校統合しやぼん玉　人美
冬晴れの雪かき後のポカポカさ　富士桜
水辺より春の胎動泡一つ　ゆら女

珊瑚の会（浦和）

緑立つ開けつ広げの能舞台　かつ子
松の芯海渺渺と竜馬像　喜恵
語部の膝をくづして蓬餅　マスミ
搗くほどに深きみどりや草の餅　水尾
潮騒や富士差し上ぐる松の芯　昇
草の餅古墳の見ゆるカフェテリア　恵子
草餅の粉こぼしけり母の膝　史代
松の芯男結びの菰を解く　和子
若緑仕分けて洗ふ嬰の物　広子
回り合せの米寿と二十歳松の芯　和葉
小学校は明治創立緑立つ　節代

円卓の会（浦和）

香車指す十九の春の凛凛しき目　輝翠
日と月の恋の鞘当て春の潮　修
白椿一期一会の茶の香り　静香
聞香の衣擦れゆかし春の月　翔太
雪虫の慌しさや母白寿　道を
左手に余寒右手に赤ワイン　月を
香り立つ上野の山や春兆す　鶴城

たかんな俳句会（川口）

姉妹着る服の数々針供養　久美子
白魚の命まるごと光りけり　のり子
針供養齢をかさね針重し　福美
蕗味噌や苦味を好む年となり　小麦
白魚の目の輝きを掬ひけり　勢津子
小町針色鮮やかに針祭る　義子
白魚を飲み込む眼定まらず　鶴城
嫁ぎし娘の晴れ着もこの手針祭る　水尾
職人に畳の匂ひ針供養　静香

花衣の会（浦和）

風光る古墳を護る埴輪群　みよ
畦青む田の神さあはほほゑみて　みち
草萌る少年犬と丘に立つ　峯雄
針の術どれも可愛いく吊し雛　治
裏庭に古き祠や午祭　章嘉

皐月の会（浦和）

直伝の刀匠の火や霙の夜　美佐尾
遠山のまだ白けれど草萌ゆる　珪子
下萌やリールいつぱい駆くる犬　順子
風の子となり寒風に飛び出せり　紀子
土手青む二人の歩幅ゆるやかに　静香
走り行く車夫の太股余寒かな　孝麿
主なき京寂庵の余寒かな　暦文
下萌に那須の大地が奮ひ立つ　きいち

芙蓉句会（浦和）

草萌の長堤をゆく亡夫かな　正子
紙ヒコウキ競ふ園児等下萌ゆる　道子
遊歩道割れてものの芽出でにけり　税子
受刑者の見つむ下萌え小窓下　仁
ゆつくりと風車動いて下萌ゆる　ともこ
下萌ゆる瞼の君が目を覚ます　文子
下萌や母に応ふるシルバーカー　美子

水明松本句会（松本）

目の前でおみくじ完売初詣　マリス
御神渡りまだかと覗く人だかり　玲子
風花舞ふ髪染めの筆ふと置けり　寿子

ミモザの会（横浜）

片栗の花や祖母には無き青春　萬蝶
さらさらとショートカットに春近し　亜弥子
盆梅の妻の顔して客迎へ　由美子
そちこちにそそと集ひし片栗の花　慶子
江戸古地図繙き歩く冬日向　栄子
かたかごの反りて見返り美人かな　玲子
あつてなきごとかたくりの花の影　史代
かたかごやかつてをなごはしたをむき　千春

若鮎句会（浦和）

春の日や鳴る靴音と杖の音　幸代
春の日のパンダは転がつてばかり　拓真
横顔の美しき観音黄水仙　稀香
寝返りの赤子遍き射す春日　さなえ
春の日や浮足立ちてつまづけり　香音子
春の日や大あくびする猫と我　夕峰
春の日のひかりこぼるる水面かな　亮一
春の日に思ひ出したるホールかな　順
春日の地下駐車場満の文字　月を
にじり口へ向かふ飛び石黄水仙　鶴城
春の日や風に追はるる竹ばうき　喜夫

野ばらの会（浦和）

一碧の空を水面に春の色　秀子
海釣りの糸に波紋や春の色　夏江
鳥はみな尾を持ち跳ぬる春の色　茂子
春駒の未来に賭くる熱き瞳よ　治江
春駒の跳ぬる牧場の土柔し　栄子
春光や土のひび割れ芽の出づる　みき子

和歌山水明句会（和歌山）

野火煙り苗字同じゆう三十戸　和子
ひじき干す水軍の裔指太し　道子
土筆野に歩の定まらぬベビー靴　千枝子
受験子のノートパソコン指で書く　千世子
涅槃西風同じ体勢鳩の群れ　満耶子
水攻めの土手に咲きけり梅の花　きわゑ
縫物の達者な祖母の針供養　洋子
九字を切る忍者の目角風ひかる　廸代

光が丘俳句教室（東京）

けん玉の真中に入りて春近し　はる
梅園のあちらこちらに投句箱　康子
早梅がりんと一輪咲き誇る　カツ子
車椅子押す梅かをるところまで　理恵

鶴川山百合句会（町田）

アメ横は無国籍街冬帽子　雄二郎
元彼の温もり恋し寒雀　月を
冬帽子今尚阪神タイガーズ　喜久
寒雀の胸のふくらみ愛ほしく　史代
ベビーカーに収まる嬰の冬帽子　広子
幼子の右目隠せり冬帽子　由美子
寒雀押しくら饅頭はじかれて　千春
面構へ少し和らぐ冬帽子　萬蝶
寒雀一羽は少し距離を置き　理恵
色ちがひ母編む双子の冬帽子　美千子
曲芸にくぎづけ小さき冬帽子　玲子

繭の会（浦和）

春立つや北北西に舵を取れ　比早子
梅の香に庭の草木も目覚めけり　悦子
立春のひかりコーヒーに渦巻く　まりこ
空晴れて梅の枝先淡き紅　トエ
木の芽和心づくしの喜寿祝ひ　粉雪
朝まだき笹立春の葉音かな　風舎
梅開花ぞろ目となりし齢かな　夕峰
生垣と背のびしている梅蕾　さよ子
白梅や隠れてゐたる小指姫　月を
梅が香や豪速球の老投手　鶴城
立春や木々の日面我先に　京子

きざきサークル（浦和）

薄氷を飛び越してまたケンケンパ　喜代子
地面が動き出す末黒野の芒　タイ
薄氷の池に動かぬ魚の影　啓子
我道を末黒の芒に連ねたる　和枝
バリバリと踏んで登校薄氷　かつ子
ぶるるんと身震ひの犬薄氷　倶子
薄氷やひときは池の耀きて　和子

芽吹句会（浦和）

半仙戯地平を越えて浮かびけり　修
平らかにひと日を送り春夕焼　玲子
手の平の魔法に消ゆる春の雪　正子
陽の光ながれ雨水の瓦屋根　ひろこ
春光やバカラのグラス罅微か　富子
下萌ゆる土竜ひたすら道づくり　千重子
競ひ合ふ平和な五輪雪けむり　チアキ
雨水とや越後は未だ雪の中　道を

水明熊谷句会（熊谷）

空き家にて殿様気取り猫の恋　正行
野仏をすつぽり包む野火の渦　秀子
恋猫の人恨むこと知つてをり　燈女
猫の恋頁をめくるときはげし　治江
野焼せり駐在さんの馳せ参ず　栄子
まづ祝詞大太鼓打ちいざ野焼　徹平
火は風を風は火を呼び野火猛る　茂子

野菊の会（与野）

浮雲と微睡んでゐる猫柳　美代子
まつすぐな犬の瞳や春寒し　和子
稜線に燃えあがりたる寒夕焼　知子
春寒の礼拝堂へ靴を脱ぐ　光子

山茶花（浦和）

春浅しホットミルクに蜂蜜を　マスミ
犬ふぐり暗渠の向かうは隣町　泰子
犬ふぐり放置畑を輝やかせ　光子
犬ふぐりベンチは老人二人なり　清一
春浅し木々の芽固さゆるめけり　美江子
老杉に水のぼる音春浅し　綾子

りそな俳句会（浦和）

初午や狐の嫁入り気に留めず　道を
如月や鯉の蠢く神の池　暦文
キューポラの火入れ赤赤一の午　建治郎
如月の息かけて拭く硝子窓　寛治
初午や太鼓代はりの薦被り　雅夫
初午やコロナ禍ストップ手を合はす　勲
義理チョコもなく過ごす身の二月かな　久美子
淡き雲浮かす二月の忘れ潮　マスミ

櫻蔭句会（浦和）

追伸にこぼるる本音春浅し　由紀子
春浅し遠くに雪崩聞くしじま　道子
沈丁花セーラー服の日々浮かぶ　公子
春浅き風のせ水路滔滔と　真理
新婚の植ゑたるミント春浅し　美智枝
雨戸繰る一人居の父沈丁花　多美子
春浅し秩父連山こむらさき　茂子
春浅し遠き山々けぶりたつ　千恵
今朝の庭掃き清められ沈丁花　美子
青文字の花の一粒浅き春　幸代

櫟の会（浦和）

目刺焼く待てずに晩酌お父さん　克之
自分への褒美格上げバレンタインチョコ　富子
義理チョコの列に混ざりてバレンタインデー　文子
バレンタインデー色華やかなチョコ売場　富美子
恋心芽生えし少女バレンタインデー　千重子
チョコ持つてバレンタインデーは墓地を行く　敦子
バレンタインデー八十路の身には他人事　妙子
背押され無言で渡すバレンタインの日　朋子
目刺焼く独居の母を思ひ遣る　裕誌
愛の文添へてバレンタインのチョコレート　彰二
オリンピックの超絶演技目刺焼く　治子

あゆみの会（浦和）

頬被ざるを抱へて安来節　和
丑三つや昔夜盗は頬被　俱子
鮒煮る明日の煮凝り待遠し　山遊
舞台上鼠小僧の頬被　重子
蟹股で踊る火男頬被　圭子
ひとり酒煮凝りの目に語りかく　藻好

雛の会（浦和）

春浅し序でに頼む届け物　喜恵
蜆汁口割らぬ奴二つ三つ　輝翠
春浅し座すれば冷ゆる腹部かな　チアキ
春浅し娘杜氏の紅うすし　燈女
ごつくんと幸福の音蜆汁　政代
浮き沈みあるも人生蜆汁　佐江

蝌蚪の会（浦和）

東風吹くや白きシューズを新調す　朝香
先生の声裏がへり大試験　元美
過去現在並べて愉し蘖ゆる　ひさの
其も良しと切りたての髪東風の梳く　礼子
推薦に伸るか反るかの大試験　風舎
大試験時計ばかりが気になりて　さち子
偶然の過去問あたる大試験　るみ子
掲句には我が郷見たり土手の東風　しるく

☆

☆

毎日が現責めなり謝肉祭　月を
隣席の貧乏ゆすり大試験　鶴城
朝東風や漁港に戻る船迎ふ　宣子

新樹の会（浦和）

春雷や牛久大仏泰然と　清吉
倭の国の久遠の歴史春霞　平通
鼻声のマダムの電話春の風邪　京子
畑焼くや絶えて久しき西部劇　正信
威儀正す久米仙人春一番　徹雄
むかしなら自己診断よ春の風邪　道を
久久の戦火の画面薔薇芽吹く　修
久に引く鎖の重み春の嶺　鶴城

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。　主宰　山本鬼之介

［指導者］　網野月を
［作　品］　５句　［受講料］1,000円
［方　法］　①用紙自由　②住所･氏名･電話番号を明記　③84円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付
［送付先］　網野月を　　電話 080－7580－0208
〒338-0012　さいたま市中央区大戸１-31-２

遊行柳

秋谷風舎

杖忘れの温泉、といわれる温泉施設が栃木県にある。温泉に入った帰りには、その効能で杖を忘れる、とのうたい文句だ。術後だった私は、春先、ひざ痛を抱えた妻と二人で、この温泉まで一泊で出かけた。宿泊の受け付けを済まして通路を進むと、壁に温泉の利用者の声という、効用が書かれた紙が、多数貼りだしてあった。本当なのかと疑念は湧くものの、決して悪いことはないだろうと思って風呂に入った。

風呂場には、異なる薬湯が二つあった。少し浸かるだけで、体がしびれる程、効いてきた。露天風呂もあった。休憩を挟み何度も薬湯につかった。浴場を出る時に気が付いた。浴場出入口前の壁に、遊行柳を詠んだ俳句と和歌が掲示されていた。

芭蕉　田一枚植ゑて立ち去る柳かな

蕪村　柳ちり清水かれ石ところどころ

宗因　時雨にもしばしとてこそ柳蔭

西行　道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ

氏郷　今もまた流れは同じ柳蔭行きまよひなば道しるべせよ

奥の細道は何度も読んではいたが、この温泉近くに遊行柳があるとは思ってもいなかった。フロントで遊行柳の場所を尋ねると、地図をいただいた。この温泉から二～三kmのようだ。翌朝、食事を済ませて、遊行柳を目指して出かけた。枯田が広がる片隅にあった。案内がなければ、決して目には留まらないだろう。落葉林の縁にあった。落葉して丸裸の樹木だった。樹木と田んぼの間には、清水なのか、ちょろちょろと水が流れていた。西行歌の趣きは、全く感じられなかった。西行から八百年以上、芭蕉から三百年以上、時が経過していた。確かに、芭蕉句碑、蕪村句碑、西行歌碑があった。長年、雨や雪などを受けてきたのだろう、彫られた文字の輪郭は崩れかけていた。那須連峰は雪に覆われていた。北風も冷たかったが、その日一日、体は芯から温かかった。

遊行柳と思われた丸裸の樹木は、本当は枯れていたのか。そうではないのか。気がかりだった。確かめたくて、四月中旬、一人で見に行った。落花の田舎道を進むと、樹木は芽吹いていた。春田の中に、遊行柳と思われた樹木が芽柳になっていた。

水明通信

大阪で一番美味しい焼肉店

秋谷風舎

焼き肉を詠んだ秀句があるのだろうか。いつか季語になるのか、ならないのか。焼肉店の歴史は、戦後のようなので、これまで俳句の題材には、なりにくかったのだろう。私の食レポをご紹介します。

食い倒れの大阪に転勤になった。大阪の事務所は、北新地（東京銀座のバー街のような所）のはずれにあった。北新地は、朝夕、通り抜けるだけだったが、サラめしの場所になった。何処のお店で食べても旨かった。大阪で一番美味しい焼肉店のことを聞いたのは、送別会の時だった。東京の会社に勤め、五十歳を過ぎていた。もう転勤はないだろうと思っていた。休暇をとって、花の吉野山を訪れていた時、大阪への転勤内示を受けた。

東京在学中の娘が、夏休みで芦屋の社宅まで泊まりにきた。焼き肉が食べたいというので、一番美味しいと聞いていた焼肉店に連れて行った。電車が鶴橋駅に着いてドアを開けると、焼き肉の匂いが車内に漂ってきた。鶴橋駅の周りには焼肉店多いが、通り抜けて、駅から歩いて十五分程で、目指す焼肉店に着いた。引き戸を開けると、婆さんが入口の土間に立っていた。「ありがとうー」出迎えのあいさつだった。きしむ板廊下を進んで、踏むとへこむ畳間に通された。脚のないテーブルの上に七輪があった。娘は骨付カルビとユッケほか、妻はヒレとロースほか、私は骨付カルビにハラミとホルモンを、それぞれキムチも頼んだ。肉を焼き始めると、部屋中に煙りが充満した。「東京からわざわざ可愛い娘が来たのに、なんでこんなにひどい店に連れてきたのか」娘が怒った。小さな換気扇が一つあるだけで、換気の役には立たなかった。三人とも髪の毛から着衣まで、焼き肉の匂いにまみれていた。店を出る時、婆さんに「ハラミが美味しかった」と声をかけた。と、婆さんから「昨日あたしが手でもんだよ」と返ってきた。

夏の宵媼手もみのハラミかな

その年末、娘から電話がかかってきた。「冬休みで今、大阪駅にいる。この間の焼肉店に連れて行ってくれ」と。娘と二回目の鶴橋の焼肉店になった。そして春休みの娘と、三回目の鶴橋の焼肉店の時には、娘はコリアタウンでキムチを買い込んだ。その夜、娘は、焼き肉の匂いにまみれ、夜行バスで帰京した。

一昨年の夏、妻と二十年ぶりで鶴橋の焼肉店を訪れた。引き戸を開けると、若い女性から「いらっしゃいー」と出迎えを受けた。ありがとうーの婆さんは、入口土間の壁に貼られた写真の中にいた。若い女性は、婆さんのお孫さんだった。娘が五人の子供をもうけた。次は、孫達を連れて行こうと思っている。

水明全国大会のご案内

［と　き］　2022年7月6日（水曜日）

［ところ］　浦和駅東口パルコ9階第15集会室
ロイヤルパインズホテル浦和，浦和パルコ第15集会室。詳細は5・6月号に発表。

［行　事］　水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞他の授賞
新誌友紹介者の表彰。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と授賞、講評等。

5、6月号に添付の指定用紙を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。（申し込みは5月1日～6月15日にお願い致します。）

担当：総務部

最近の名句集を探る
座談会――司会＝筑紫磐井
大西　朋　しなだしん　西山ゆりこ
星野椿句集『遥か』
星野恒彦句集『月日星』
茅根知子句集『赤い金魚』

◆巻頭三句
永島靖子／鈴木貞雄
大橋　晄／降旗牛朗
鈴鹿呂仁／小川晴子

◆俳句と短歌の10作競詠
小林貴子
松村由利子

◆今月の華
中村姫路
矢作十志夫

【新コーナー】
俳号の履歴書
増成栗人
大高霧海

「俳句四季」全国俳句大会予選通過作品発表

好評連載
大西　朋　俳句へのまなざし
神作研一　手のひらの江戸―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
酒井佐忠　本の窓辺
二ノ宮一雄　一望百里

新連載
南　伸坊
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き

俳句四季 Haiku Shiki
2022年5月号
4月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

水明全国大会　兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼　題　「行く春」（ゆくはる）　春の名残・春のかたみ・春の行方・春の別れ・春行く・春の果

「燕」（つばめ）　初燕・つばくらめ・川燕・里燕・群燕・夕燕・燕来る

※「行く春」「燕」は右の季語で詠む事

「大」詠込み

※「大」は季語として使わない事。春の季語を入れて詠む事。

例句　囀をこぼさじと抱く大樹かな　星野立子

大いなる春日の翼垂れてあり　鈴木花蓑

句　数　通じて二句（一組）

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料　一組につき千円

締　切　五月十日（発行所必着）

※投句用紙（水明三月号・四月号に添付）使用のこと。コピーも可。

風　声

○**俳句四季**二月号――「季語を詠む」欄

1DKの窓からの景蔥の擬宝　　**鬼之介**

○**現代俳句**二月号――「十一月号特別作品より」欄

田中亜美氏の鑑賞で

舶来のワクチンを待つ山椒の芽　　茂木和子

時節柄、新型コロナのワクチンだろう。百年に一度ともいわれる世界的規模の疫病。「舶来」（実際は空輸なのだろうが）のレトロモダンな響きが、かえって私たちの直面している事態の歴史的広がりを伝えているようだ。山椒の芽の緑と香気のように、このワクチン、効きますように。

○**現代俳句**二月号――「百景共吟より二句鑑賞」欄

田中亜美氏の鑑賞で

恋つて氷なんだ融けてなくなる　　網野月を

「恋」と「愛」の違いとはなんだろうか。「恋」は「愛」とは違って動物の本能的な感情という意見もある。自分本位の「欲」を伴うのだ。相手の気持ちに関わらず一瞬で恋に落ちることもあるし、すぐ冷めたりする。この作者の恋もすぐに冷めてしまったのだ。相手から氷のように冷たい仕打ちをされたのかもしれない。

○**現代俳句**二月号――「現代俳句の風」欄

背伸びして蕾数ふる余寒かな　　青木鶴城

積る葉に温々眠る武甲山　　大塚茂子

継ぎ手なき田畑やつれて冬の雨　　神田治江

寒紅や鏡の中に違ふ顔　　越田栄子

登園のバスから振る手冬ぬくし　　宮崎紫水

○**天塚**（宮谷昌代主宰）一月号――「珠玉一句」欄

アラジンのランプ夜長の燈とならず　　**鬼之介**

○**草笛**（太田土男代表）二月号――「受贈誌一詠」欄

アラジンのランプ夜長の燈とならず　　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）二月号――「受贈俳誌美術館」欄

煤逃やかつて愛國婦人会　　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）二月号――「受贈句集ご紹介」欄

句集「マネキン」より自選十句を紹介

しばらくはキャベツの芯を噛みたまへ　　**鬼之介**

山眠り伸ばしてみたる乳房かな

マネキンを目白へ運び冬霞

三鬼が叫ぶ紫黄よく来た忠治をやれ

くろがねの匂ふ水こそかな女の忌

燕にも五代の家格蔵の町
沖は霾天様になるひと梶芽衣子
花吹雪ビッグシップの船出かな
葉柳やむかし銀座に点灯夫
大津絵の鬼みな愉快夜半の秋

○**新月**（松田碧霞主宰）二月号――「受贈俳誌紹介」欄

髪に草の実頬にめしつぶ吉野山　　**鬼之介**

○**篠**（辻村麻乃主宰）一九九号――「他誌拝見」欄

歌代美遥氏による水明十月号の紹介

「水明」は高浜虚子の高弟で女性俳句の振興に尽力をした、女流俳人の草分けであった、長谷川かな女によって創刊された。

創刊より九十周年を迎える。現在は**山本鬼之介主宰**が継ぎ、「気楽に楽しく俳句を親しんでみませんか」と、掲げ情熱のある主宰のお姿を感じます。

つまべにや肌身離さず守り札　　**鬼之介**

つまべにのひらがな表記が婀娜めく匂いを漂わせ、女身の肌の微温が生々しく読者へ嬉々とする肌の香りまで伝わる。

つまべには古くに、花弁の汁で爪を染めて遊ぶ女の子たちから、爪紅という別称が生まれた。鳳仙花という名称の

特集　俳句における究極の擬人法とは
特別企画　玩具・遊び　ノスタルジー
巻頭作品10句
石田郷子・唐澤南海子・谷中隆子
坪内稔典・日下野由季・山口昭男
山下美典・渡辺誠一郎

俳壇
5月号
4月14日発売
定価900円（税込）
巻頭エッセイ
加藤耕子
八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句（第Ⅲ期）…亀井雉子男・笹瀬節子
連載
色の歳時記……大島雄作
俳句文法　そこが問題、そこがポイント……井上泰至
俳句史を見直す……秋尾　敏
ものがたりのある俳句……村上鞆彦
先人のことば……中西夕紀
小説・遥かなるマルキーズ諸島……マブソン青眼
俳句と随想12か月　河原地英武・長島衣伊子

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

方が、一般的である。小さな花に込められた意識の感覚である心象は、歳月をかけた秘密裡の護符へ読者を誘う。神仏の霊が籠もり、人を加護するお札に願いを込めたドラマは、読者のイマジネーションを刺激して、幻視、幻臭、幻触の甘美な陶酔を誘う。

動かれぬ家居いつまで山椒魚　由良ゆら女

山椒魚は体色や臭いが山椒に似ているという説もあるが、半分に裂いても死なないので「はんざき」と別称がある。目は退化し外鰓は残っている。

愛くるしい姿とは言えない陰陰とした水底に、微動だもしない形態の山椒魚へ諦めの混じる愚痴りを聞いてと、いう繰言が痛快でもある。

時計して眠る男や星祭　網野月を

星祭は五節句の一つである。日本に古くから伝わる「棚機つ女」の伝説や禊の行と合わさり、奈良時代以降の宮廷の主要行事となった。江戸時代の古書によると棚を設け諸々を供え、梶の葉に詩歌を書いては、二星に捧げるとある。

時計をして眠る男とは、常に時計をして肌身に離さずしているエポックに、男が束縛されている。この二人の関係の継続を、読者はどの様な未来を評定するのだろうか。

感銘句

秋めくやフォークダンスの手のぬくみ　矢作水尾

降り止んで捨て台詞ひとつ秋の雷　山中みどり

○**太陽**（吉原文音主宰）二月号――「受贈誌御礼」欄

枝はなれ流転の姫となる枯葉　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）二月号――「諸家近詠」欄

神の座へ初霜を踏む浅沓よ　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）二月号――「一書一句」欄

マネキンを目白へ運び冬霞　**鬼之介**

○**門**（鳥居真里子主宰）二月号――「風韻抄」欄

千住葱を嚼めば現に兄ぢや人　**鬼之介**

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和四年二月二十八日現在―

内田恵子　10口　伊藤由美子　5口
山口富子　3口　小島喜代子　5口
野田静香　5口　松宮保人　10口
福田千春　20口
関根千恵　5口

―合計63口―

圧倒的な季語数・例句数を誇る
俳句歳時記の最高峰、15年ぶりの大改訂!!

新版
角川俳句大歳時記

春・夏・秋・冬・新年

角川書店 編
【編集委員】
茨木和生
宇多喜代子
片山由美子
高野ムツオ
長谷川櫂
堀切実

本書の特色

見出し・傍題合わせて1万8000季語以上を収録
旧版より110%以上増ページで、より充実した内容に
現俳壇を代表する俳人・研究者による監修・執筆
例句数5万句超。近年の秀句もふまえ
旧版から大幅に刷新

2022年2月
『春』より
順次刊行

特設サイト OPEN!

A5判／上製／函入
約700～800頁(予定)
各巻定価 5,995円
【刊行予定】『春』2022年2月28日／『夏』2022年5月／『秋』2022年8月／『冬』2022年11月／『新年』2022年12月

KADOKAWA　KADOKAWA公式サイト https://www.kadokawa.co.jp/
発行　株式会社KADOKAWA　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 『大歳時記』編集室 050-1744-2828

角川俳句叢書　日本の俳人100

句集
夜須礼
［やすらい］
井上弘美

夜須礼の花傘を呼ぶはやち風

「夜須礼」という季語に、母と産土の地への尽きない思いを込めました。（あとがきより）

〈第10回〉
星野立子賞受賞!!

定価2970円(10%税込)
四六判：上製 204ページ
ISBN：978-4-04-884419-2

『読む力』で俳人協会評論賞を受賞した著者の十三年ぶり、満を持しての第四句集。

日本の俳人100
角川俳句叢書

KADOKAWA　発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
お申し込みはお近くの書店かKADOKAWA購入窓口 0570-002-008(ナビダイヤル)へ

後記

今年の冬は寒さが厳しかったので、春になり、時には初夏のような日々には、ほっとします。しかし、新型コロナウイルスを恐れて、息をひそめて三年弱、本当にあきあきします。

去る三月七日の米ジョンズ・ホプキンス大の集計によると、新型コロナウイルスによる世界の死者は六〇〇万人超、日本は約二万五千人とか。その上ロシアのウクライナ侵攻が行なわれ、さらに命が奪われています。例年ですと、この時季のテレビは桜の開花の日を伝え、花見客の声を伝え、日本中が浮き浮きと、幸せなニュースにあふれます。それなのに今年は何という年でしょう。テレビはコロナと戦争のニュースばかりです。

水明でも皆様ご承知のように、新型コロナウイルスによって、一月の「新春俳句大会」二月の「水明忌」三月の「春の吟行会」等、すべて取り止めになってしまいました。一同会して句会が出来ないのは残念としか言えません。

句会が出来なくて残念でしたが、良い事もあるなと密かに思いました。それは今月号の「水明忌」の記事をご覧下さい。一同会しての句会が出来ないので、代りの献句の募集に主宰はじめ五十九名の方が応じて下さいました。浦和周辺で行なう水明忌では、仲々ご出席頂けない遠方の方々が、句を寄せて下さいました。秋子・嵯迷・紗一・光二の先生方も、さぞお喜こびの事と思います。

さて、今年の各賞を受賞される方々が、そろそろ決まりはじめました。水明五月号誌上で、受賞者のお喜こびの声をお伝え出来ると思います。ご期待下さいませ。そして、七月の大会が無事に開催出来ます様にと心から願っております。

（節代）

今月のはてな？

抄（すく）ふ　19頁
翻筋斗（もんどり）　〃
磯馴松（そなれまつ）　20頁
篠（ひび）　26頁
石蓴（あおさ）汁　〃
大革（おおかわ）り　37頁
耀（ひか）り　54頁
草石蚕（ちょろぎ）　56頁
目角（めかど）　71頁
現責（うつつせ）め　73頁

水明発行所受付時間

曜日：**（月・水・金）**

時間：12時半～午後4時半

（火・木・土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和四年四月号
通巻一〇九九号
令和四年四月一日発行

発行人　山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所　水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代　半年分　六、〇〇〇円
　　一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
　　一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
　　一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所　中央美版

水明全国大会投句用紙

☆投句締切　五月十日（必着厳守）

句　数　通じて二句（一組）　・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
・組数は制限しない。
出句料　一組につき　一、〇〇〇円（同封）
用　紙　足りないときは、コピーも可。

きりとりせん

「行く春」（ゆくはる）
「燕」（つばめ）
「大」詠込み
※71頁参照の事

兼題

都市又は府県名	姓並びに俳名

きりとりせん

「行く春」（ゆくはる）
「燕」（つばめ）
「大」詠込み
※71頁参照の事

兼題

都市又は府県名	姓並びに俳名

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

題

季音 雪 月 花

六月号 三月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名（俳号）

き り と り せ ん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

七月号　三月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集　七月号　四月二十五日締切

七月の兼題　「日永」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

木菟や風に溶けゆく櫂の音　石井喜恵
片皿に乗つ込み鯛の尾が立派　石山かつ子
竜天に登り息づく絵蝋燭　大橋廸代
唐破風の異彩を放つ浅き春　大村節代
恵方より春一番の葉擦れなす　小倉倭子
果てしなき虚空に向けり帰る雁　栢尾さく子
雪起し一夜に描く墨絵かな　宇田白鷺
落葉松に触るる眉月春浅し　大場順子
残雪の山を仰ぎて聞く校歌　鳥羽和風
紅梅の莟舞妓のうけ口に　藤澤喜久
浅春の瀬音未だし旅鞄　丸山マスミ
寒燈と言へど寄辺となる温み　梅澤佐江
春駒の楕円の瞳すがすがし　大塚茂子
春立つや爪よく伸びる薬指　福田千春
逆縁を伝ふるスマホ寒燈下　近藤徹平
焼野見る黒き瞳の農夫婦　河野はるみ
雨水とや越後は未だ雪の中　日髙道を
ひと筋の雲の曳き行く余寒かな　青木鶴城

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

樹齢いま二千年余の冬芽かな　横山君夫
冴ゆる灯や稽古帰りの吾妻橋　染谷正信
過疎村に男子誕生初霞　渋谷きいち
冬の暮客待ち顔の占ひ師　村杉清吉
寒鰤や回転寿司の金の皿　反町　修
山眠る未知なる力蓄へつ　越田栄子
白壁の家並琥珀に日脚伸ぶ　山岸久美子
我先と女系家族の初鏡　梅澤輝翠
風花に青春の日々巻き戻す　西幅公子
初雪や陶の狸が薄化粧　笹本啓子
リモコンを探す左手寝正月　檜鼻ことは
駅伝鼓舞し鳶二日の大空を　丸屋詠子
劇場を出れば現よ月冴ゆる　橋本京子
キャッチボール転がる先の初景色　元田亮一
甘え子の一礼凛と寒稽古　新　暦文
大革の一打ちカンと冴え渡る　原田秀子
下町の屋根に十字架除夜の月　曲淵徹雄
破線どほりに切れぬ鋏や雪催　保坂翔太

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和四年四月一日発行　毎月一日発行
（第九十五巻　第四号）　定価　一〇〇〇円